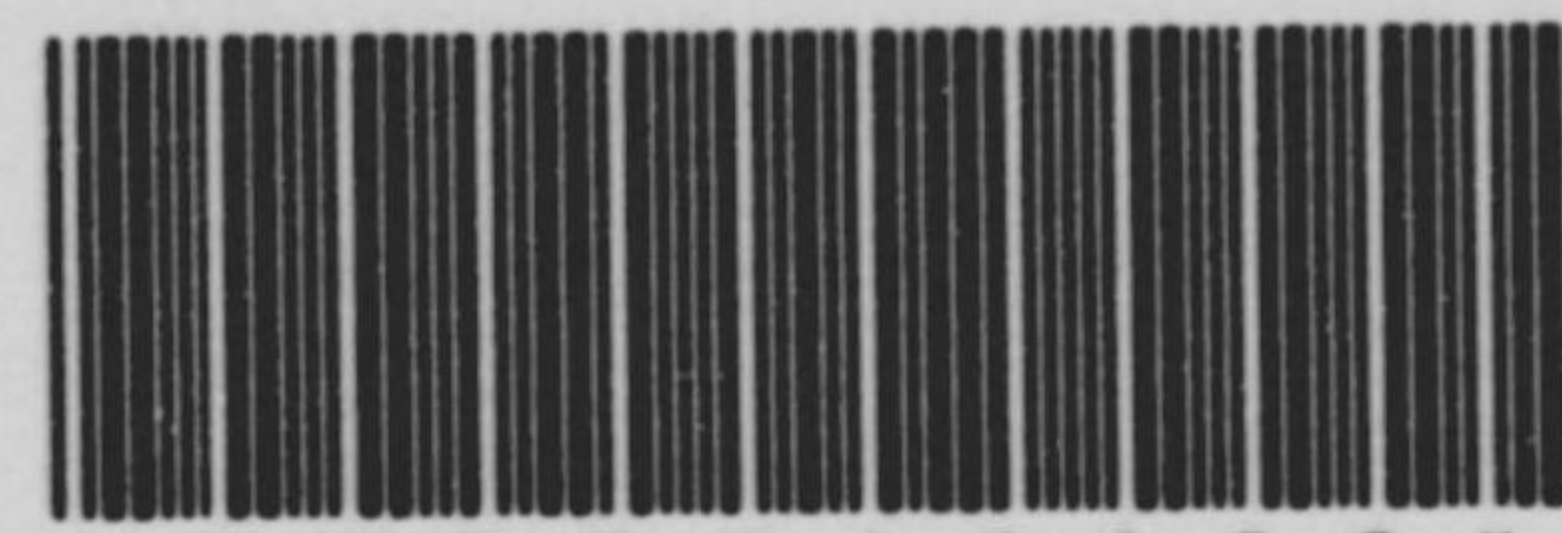


334.733

Ka728a



\* 0025243000 \*

3

0025243-000

334.733-Ka728a

アジアの囚人

川端福一・著

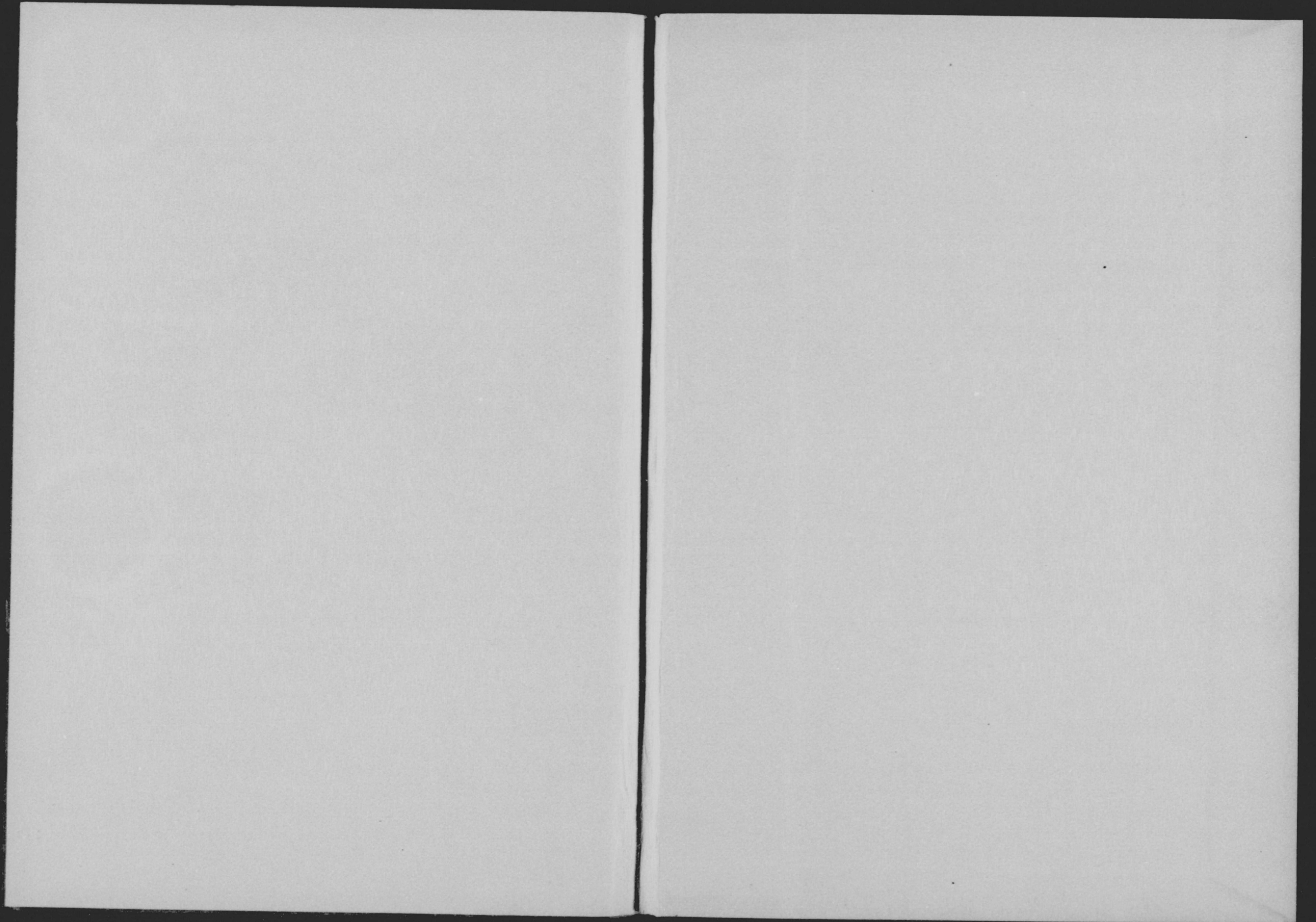
亜細亜画報社

1941

ADE

この著作物は、著作権者不明のため、著作権  
第67条の規定に基づき、平成12年5月  
付けで文化庁長官の裁定を受け使用するもの





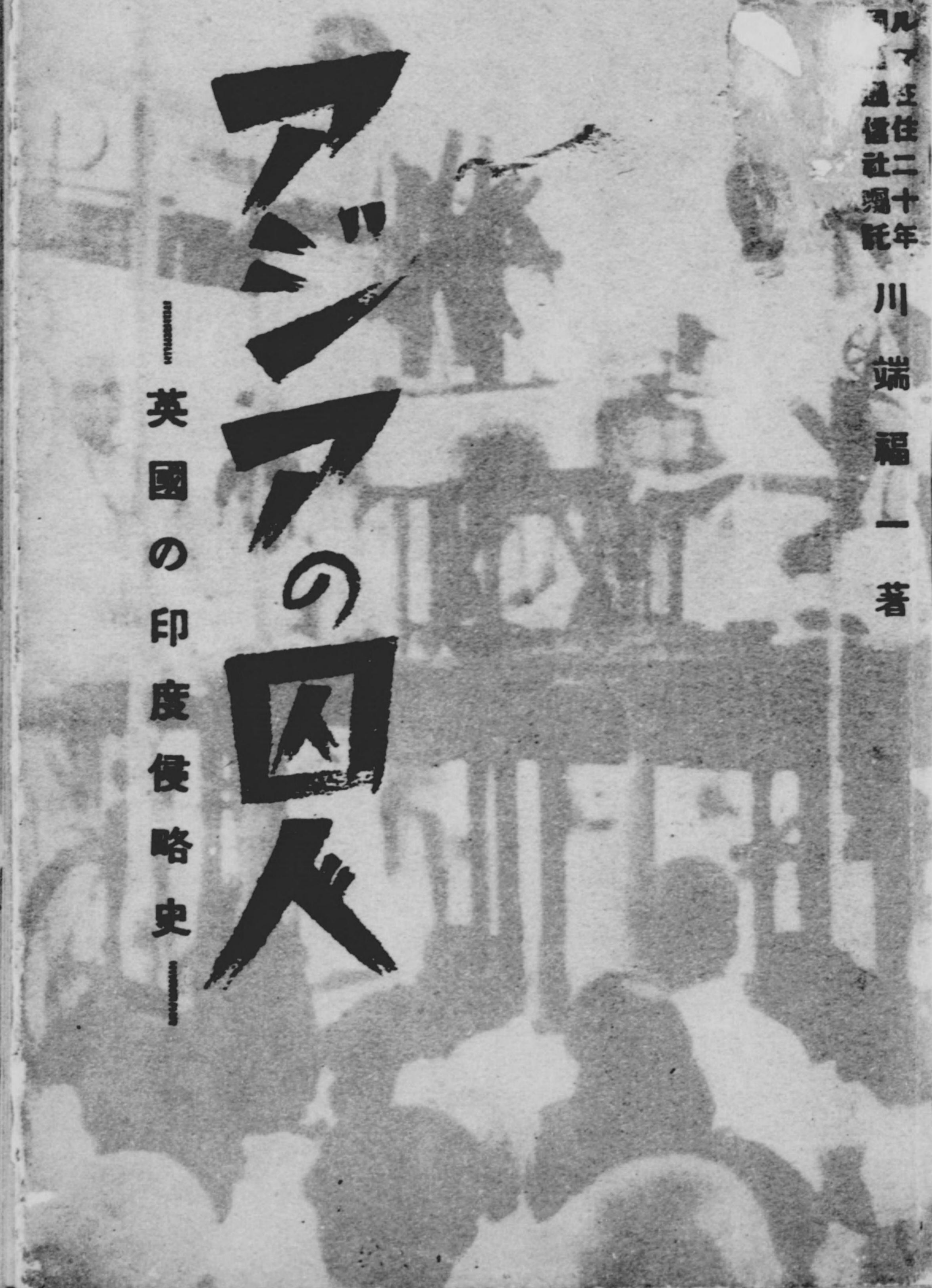


ト工22-89

# アジアの巨人

—英國の印度侵略史—

元長  
凡  
通  
信  
社  
編  
託  
川  
端  
福  
一  
著





元ヒルマ在住二十年  
同盟通信社囑託

川端福一著

# アジアの囚人

—英國の印度侵略史—

亞細亞畫報社・刊

贈

浅沼亨子殿



334.733  
Ka728a



639148

## 自序

筆者は一九一四年（大正三年）以來およそ二十年間、印度及びビルマに在住し、英國の對印政策を身をもつて體驗し、見聞した。

英國の印度搾取政策は實に深刻である、しかもその方法は洵に巧妙である。たとへば、印度民衆の生活と最も密接な關係をもつ電燈・電氣・交通・通信等の公共企業はすべて英本國在住の英本國人の投資に限定され、印度人及び印度在住の英國人のこれに投資することが絶対に許されない。

このことは印度大衆の支拂ふこれら公共企業への料金を株主への配當の形式をとつて暗々裡に英國へ移すものであつて、まことに巧妙な搾取手段である。また印度に於ける鐵道敷設工事等は、全部印度人の福祉を向上せしむるといふよりも、英本國の重工業者の利益壟斷のため、また英本國貿易業者の利潤追求のために起工されるといふ



わけで、印度の公共企業そのものは、公共的本質より逸脱して英本國資本家のために英國の印度搾取の手段に利用されてゐるのである。

この英國の惡辣な印度搾取のため印度大衆は深刻な苦惱をなめ、印度三億の大衆は甚大なる反感をもち、怨嗟の聲を放ち、永い間熾烈な祖國解放の運動をつゞけてゐるが、英國は武力を以て、これを抑壓し以てその勢力を維持してゐるのである。

しかしいかに英國が武力を行使して、印度大衆の祖國解放の熱願を彈壓すると雖もいつまでもそれを維持々續することは恐らく困難であらう。それは恰も熟した果實が樹木から脱落するやうに、英國勢力の東亞からの後退を機として、この印度大衆の熱願が達成される日が来るであらう。そして英國の勢力の東亞からの後退の日は、輝しき大東亞共榮圈確立の日である。

筆者が彼地に渡航した當時は旅券の必要もなく、自由に入國できたのだが、最近では、印度及びビルマへの入國は非常に困難になつた。それは恐らくこれらの地の民族意識が猛烈になつたため、その實相を外部にもらさない爲めと、これらの大衆が外來者と接觸して刺戟をうけることを防がんが爲めと信ぜられる。

今や世界を擧げて動亂の坩堝と化してゐる。このときに對處して吾々日本人は、支那事變の處理と、大東亞共榮圈確立の大國策を遂行して、十七世紀初頭以來アングロ・サクソンの帝國主義の爲め奴隸化され、搾取されて悲惨な生活に呻吟する東亞諸民族を英國の羈絆から解放し、民族本然の姿に還元せしめ、もつて東亞の安定勢力としての日本の大使命遂行に邁進せねばならぬ。

本書は、筆者の體驗と見聞と、そして研究とを基調として、英國の印度侵略搾取の實相を描破したものである。

本書が大方讀者諸賢の南方圈認識の一助となり、併せて南進日本の礎石ともならば幸甚である。

昭和十六年七月

川 端 福 一



本書の著述にあたり、筆者はその資料をオックスフォード大學出版のP・E・ロバーツの英領印度史（一九二七年版）等權威ある英國の著書に求め、客觀的、科學的資料に基いて、筆を進めることを絶對條件となし「英國人をして、英國の印度搾取の真相を語らしめる」方針をとり、筆者の主觀が混入する如き弊に陥ることを絶對に避け、公平を本旨としたことをこゝに附記しておきたい。

— 目 次 —

|     |            |     |
|-----|------------|-----|
| 一、  | 緒 論        | 一   |
| 二、  | 印度航路の發見    | 六   |
| 三、  | 歐洲諸國人の印度進出 | 一〇  |
| 四、  | 英國制海權を握る   | 一四  |
| 五、  | 東 印 度 會 社  | 元   |
| 六、  | ブラシー戦争     | 三〇  |
| 七、  | 怪傑クライブの人爲  | 三三  |
| 八、  | 英國の印度併合    | 四〇  |
| 九、  | 英國のビルマ併吞   | 五〇  |
| 一〇、 | 印度搾取の跡     | 五三  |
| 一一、 | 東印度會社の暴政   | 八三  |
| 一二、 | 印 度 の 飢 饉  | 八七  |
| 一三、 | 鐵道と灌溉      | 九八  |
| 一四、 | 英國の残忍性     | 九七  |
| 一五、 | 第一次歐洲大戦と印度 | 一〇三 |



# アジアの囚人

## — 英國の印度侵略史 —

川 端 福 一

### 一 緒 論

世に、盗人たけくしいといふ言葉があるが、この言葉程、今日の英國の態度を適切に表現したものはないだらう。四年前、支那事變が勃發するや英國はその傀儡たる國際聯盟をしてわが國を「侵略者」と断定せしめ、各國はなるべく支那を援助せよといふ決議をなさしめたのである。ところが英國それ自身が、十六世紀の終りの頃から東方侵略をはじめ、先づ印度の侵略を完成してからこゝを據點としてその勢力の東漸をはかり、今日の英國の繁榮を築いたことは餘りにも著名な事實である。



いやそれよりも、一體英國のあの老大な植民地はいかにして獲得したのであるか、英國の近世史は、侵略のあとを綴つたものに外ならない位に、英國は世界最大の侵略者なのである。その大侵略者たる英國が、東亞の安定勢力たるわが國が暴支膺懲の軍を起し、頑迷なる支那軍閥の苛斂誅求の手から支那四億の大衆を解放するために正義の聖戦をつゞけてゐるのを指して、侵略者呼ばはりをするとは誰れか烏の雌雄を知らんやだ。元來英國はその植民政策の邪魔をするものがあれば、相手の誰れなるかをかまはずに、これを倒すことを以つて傳統的國策としてゐるのである。

此の國策のためには英國は佛國とも戦ひ、獨逸とも戦つた。そして自己の國策遂行に利用するためには、相手かまはずに提携して第三國にあたらせるといふのが英國のやり方である。その著しい例としては西曆一九〇二年に締結した日英同盟がある。この日英同盟たるや、英國は背に腹は代へられないために締結したものである。

といふのは、當時の英國は「光榮ある孤立」を誇り、國際的には超然政策を標榜し

てゐたのであるから、有色民族の、後進國たるわが國と同盟を結ばうとは夢にも考へられないことであつた。けれどもこの頃の英露の關係は、英國をして「光榮ある孤立」をなげうたせたのであつた。それはシベリア鐵道の完成によつて露國が東洋進出に本腰を入れることになつたので、英國は露國と協約を結んで揚子江の南岸に相互に鐵道を敷設しないことを約したが、江源に連なる新疆及びチベットの方面には露國の勢力進出を防ぐ何らの備へがない。ところが新疆は支那を背後から衝くべき要地であり、チベットは英國の生命線たる印度の背後を護る緩衝地帯である。露國はこのチベットを突破して印度の背後に迫らんとする氣勢を見せたのであつた。ところが英國としては何を措いてもこの露國勢力の印度侵入を防がねばならぬので、露國勢力の印度侵入の鋒先を太平洋に轉ぜしめんとし、當時露國勢力の朝鮮半島侵入のために悩んでゐる日本に目をつけて、こゝに攻守同盟を締結し露國の印度侵入の防止に備へたのである。



その結果、事態は英國の思ふ壺にはまり、露國は新疆、チベットへ向ふ勢力を太平洋に轉じついで日露の戦とまで發展するに至つたのであつた。即ち英國は日英同盟を締結することによりわが國をして露國と戦はしめ露國の勢力をくじき、自己の生命線を守つたのである。その間更らに一歩を進めて支那に不拔の勢力を扶植もしたのであつた。かくして侵略の手を益々伸ばしたのである。わが國のお蔭で今日の英國があるといつてよい。若しわが國にして日英同盟を締結しなかつたとしたならば、東洋に於ける英國の勢力は二十世紀の初頭、又は大戰の頃、露國か獨逸かのために顛覆されてゐたであらう。現に今次大戰に於て崩壞に瀕してゐるではないか。

かやうに英國は自己の利益を守るために他を利用することを忘れず、而して侵略をはかるためには手段を選ばなかつたのである。その間何らの節操もなく、恰も賣女にも等しき態度をとつた。この世界的大侵略者たる英國が、こんどの事變にあつてわが國に侵略者の汚名を冠せんとして必死の努力をつゞけ、獨りその傀儡たる國際聯盟

を動かしたばかりでなく、非聯盟國たる米國をも抱込んでわが國に壓迫を加へんとしてゐるのである。その態度の陋劣たるや言語に絶し、海賊より成りあがつたアングロサクソン民族の卑劣な根性をこゝに遺憾なく暴露したのである。こんどの支那事變にあたり、英國がわが國に侵略者といふ汚名を與へ世界の輿論を動員して壓迫を加へたのも、彼の云ふが如く平和を招來するためではなく、その傀儡たる蒋介石政權の延命を謀ることにより、自國の在支利權と勢力とを擁護せんとする魂膽であることは明かである。

されば吾々は、此の時にあたつて十六世紀以來英國がとつて來た東亞侵略政策の歴史的事實をこゝに暴露し、侵略者英國の眞の姿をクロゾアツプして紹介し、その眞相を發表して英國に對する我國民の認識を深めたいと思ふのである。



## 二 印度航路の發見

六

今日、英國が東方に勢力を張り、東亞の市場を横行し支那に數十億の利権をもつてゐるのは一に印度帝國のあるお蔭である。もし英國が印度を手に入れてゐなかつたならば今日の如き大英帝國はなかつたであらう、實に印度は英國の生命線であり寶庫である。そして地中海は英本國と、その生命線たる印度とを繋ぐ命の綱である。だから英國は一生懸命になつて地中海の覇權を握ることに努力しその維持に努めてゐる。それはさておき、とにかく英國は印度を據點として、東亞に勢力を張りその廣大なる市場と、莫大な原料とを手に入れて今日の大英帝國を築き世界に覇を唱へることになつたのは、英國が夙に植民的に目醒め海洋に出たからである。

それは獨り英國のみならず、世界の何れの國でも夙く東亞に着目したものは、世界の勝利者として立つことができたのである。げに東亞の天地は世界の寶庫である。印

度の綿を手に入れることを得た英國では産業の革命があり、それまで田舎の農家で紡がれてゐた綿糸は大都會の真ん中で、大工場に於いて紡がれることとなり、農家の家庭手工業だつた紡績は都會の大工業となつた。それによつて英國は世界の富を殆ど獨占することができたのである。

ところが一方、綿の産地たる印度では英國人の政治によつて經濟機構は破壊され、産業は衰微し、火の消えたやうに荒廢したのである。英國の綿工業地では人口は激増の趨勢を示したが、印度では人口の激減となつたのである。この一事によつても英國の隆盛はいかに印度の物産に負ふものであるか、明かである。西洋諸國としては印度を手に入れるか、否か、世界の制覇者となるか否かの分岐點であつた。だから西暦千四百年の頃からポルトガルを始めスペイン、オランダ等の西洋諸國民が印度へ、印度へと進出を企てたのであつた。尤も歐洲諸國では夙くから印度の香料、胡椒、肉桂、茶、キャリコ等を使用、嗜好する風があり、これらの品々は歐洲人の生活になくては

七



ならぬものとなつたので印度とも通商貿易を盛んに行つてゐたのであつた。加之、西暦一二七一年に伊太利ベニスの人、マルコ・ポーロが陸路支那に至り、元の世祖、忽必烈に仕へて在留すること前後凡そ二十年に及び、その間支那内地は勿論、わが國などについても見聞を廣めた後陸路印度を経て歸國したのであつたが、晩年彼は有名な東洋見聞記を著はして日本、支那、印度等の風土、人情を敘述紹介し、盛んにその繁榮、物資の豊富の狀を説き立てたのである。そのときたまたま印刷術の發明があつたためにこの書は廣く讀まれたから大いに歐洲人の東亞遠征心をそゝつたのであらうと思はれるのであるが、とにかく西洋人の印度への進出熱はかなり強いものであつた。説明の便宜上こゝに先づ西洋諸國民の印度進出の事情を概説することにしよう。

印度へ最初に來た西洋人はポルトガル人である。これは十五世紀の中頃、トルコの勃興があつて歐洲と印度との通商路を遮断されたためと、一つには當時印度の商品を取扱つてゐた伊太利人が暴利をむさぼつたので、西歐諸國民は海路印度に至り直接印

度との通商をなさんと企て、航海術に長じてゐた彼等はアフリカを迂廻して海路印度に至つたためである。即ちポルトガルでは先づ新航路の發見につとめ十五世紀の中頃國王ジョン一世の子にヘンリー航海王子とまでいはれた航海の獎勵に熱心な王子があり、私財を投じて或は天文臺を設け、或は海員養成所を創め、大船の建造をなし船員を勵ましてアフリカ西岸に沿ふて東亞に至る航路發見につとめたのであつた。その頃この航路發見の探險航海にあつたものには有名なデニス・デアスがある。ヘンリーの歿後、ジョン二世がその遺志をつぎ益々航海を獎勵し西暦一四八六年にはデニスの子、バートツシユー、デアスはつぶさに辛酸をなめてアフリカ南端の一岬に到り、その附近は風浪高き故にこれを暴風岬と名づけて復命したが、王はこれでは海員の冒險心を萎縮する虞れがあるといふのでこれを喜望岬と改めることにしたのであつた。

かくするうち西暦一四九二年、伊太利人、クリストファー・コロンブスはスペインの王妃イサベラの援助を受けて帆船三隻を艦裝し、水夫百二十餘人を率いて同年八月



三日、スペインのバロス港を出帆して大西洋を渡り、印度に達する航路発見の旅に登つたのである。そのため一時アフリカ迂廻の印度航路発見の事業は頓挫したが、ポルトガルのマヌエル大王が位につくに及び、再び航路探險事業を進めバスコ・ダ・ガマは船三隻水夫六十人を率ゐて國都リスボンを出發し喜望峰を廻りアフリカの東岸に沿ひ印度洋を横斷して雲煙漂渺の間に、遂に印度に達することに成功し、西曆一四九八年五月二十一日に印度西岸のカリカットに到着したのであつた。それ以來この航路によるポルトガル人の印度への航海は頻繁になつた。

### 三 歐洲諸國人の印度進出

かくの如くポルトガル人は他に先んじて印度へ來たのであるが、その植民的手腕に劣るものがあるためか、印度に於て餘りなすところがなく領土も久しく維持することもできずに終つたのである。

ポルトガル人について印度に來た西洋人はスペイン人、スカンデナヴィア人、ベルギー人、オーストリア人、プロシヤ人等であつて、これら諸國人はそれ／＼一度は東印度會社を起して印度への進出をはかつたのであるが、どれもこれも何ら效を收めることなくして終つたのである。餘談ではあるが當時西洋諸國がいかん印度の物資を求めんとして印度進出に熱心であつたかといふことを示すためにここにこれら諸國民の印度進出の概況を述べ、その後に惡辣極まる英國の印度侵略史を述べることにしよう。

スカンデナヴィア人の中、ノールウェー人は西曆一六一二年に東印度會社を起しコマンデル海岸に植民計畫を立てたのであるが、僅か二十餘年、これを維持したばかりで西曆一六三四年には解散の止むなきに至つた。而して西曆一六八六年より西曆一七三二年の間にこれが復興を企てたが、それも水泡に歸した。同系人種のデンマーク人は西曆一八四五年までトランケバルに植民してゐたが、その植民地を英國人に讓



つて引揚げたのであつた。またスエーデンはクリスチャン皇后の命を受けて東印度會社を起したが、西暦一六七一年に何らなすところなくして解散したのである。西暦一七三一年より西暦一七四三年の間にその再興をはかつたが、それもまた效を奏せずして了つたのであつた。ベルギー人はカロ六世のとき西暦一七二二年、東印度會社を起しカルカッタ附近に植民地を得たことがあるが、これも間もなく霧の如く消えた。

ロシアは十五世紀の頃からニキチン等の商民を遣はしたが本國との距離が餘りにも遠いため何らなすところなくして終つた。また西暦一七二〇年の頃、トリエストに於て東印度會社を起し、ベンガル附近に於て土地を借り植民を企てたが、ヨゼフ二世帝はウエネチャとの關係上、會社を援けることができず會社は遂に英國や、和蘭の聯合に克つことができずして勝をたつに至つた。

ブランデンブルクの大王エーレクトルはフランスからの逃亡者タベルニエの勸告を容れて東印度會社を創め、同社の船がベンガルに來り通商と植民を計畫したがその効

なく、また西暦一七五九年にフレデリック二世は東印度會社を起さしめんとしたが、何らの効なくして終つたのであつた。

かやうなわけでは西洋人の印度への進出を企圖するものが少なくはなかつたが、何れも成功せずに終つたのである。

西洋人のうち印度に於て事をなしたのは、オランダ人、フランス人、英國人である。オランダ人はもとリスボンに於て印度の物資を買ひ受けて、これを歐洲諸國に賣り捌いてゐたのであつたが、スペインやポルトガルの商船が印度へ往復することを知り、それに倣つて自ら東洋への航路を開くことを企て、西暦一五九四年アムステルダムの商人らが遠國會社といふのを起し四隻の商船を印度へ派して巨利を占めたので、ロツテルダム、デルフト、ホルン、ゼーラント等に於てもこれを真似する者ができ、オランダの印度通商が盛大になつたのである。だが、幾つもの會社が分立してゐてはその營業上にも不利であり、また植民政策的にみても面白くないので西暦一六〇二年にオ



ルニューエルトといふ人が、これらの会社の併合を企圖し大いに盡力したことがあるが、そうしてゐるうちに印度航路の中継場として西暦一六五〇年には喜望峰を得、更らに西暦一六七八年にはモーリス島を取り、西暦一六三二年より西暦一六五七年までの間にセイロン島に手を伸ばし土人と聯合して、先きにこゝに植民してゐたポルトガル人を島外に逐ひ出し、その通商上の據點をこゝに設けることができた——更らにモルカ、ジャバ、スマトラ、ボルネオ、セレベス等の諸島をも獲得し、いよ／＼印度航路の有望にして確實なることが明瞭になつたが、まだ印度半島に地歩を占めることはできなかつたのである。

#### 四 英國制海權を握る

オランダは西暦一六六〇年に始めて半島のネバガダムを獲得して、後三年にしてコチを領し、西暦一六七四年にはアメラブールを奪取し、サムリを制せんとしてクラン

カール附近の土地を占領した。こゝに於いてオランダの印度に於ける侵略計畫が大いに進捗したのであるがオランダはこの期にあたりポルトガル人に對抗しやうと企て、印度の土人がポルトガル人に對して反感を懐いてゐるのを利用して自家の地盤を擴張せんとばかり、シャール、ヂヤハン、アウラン、ゼブ等と結んで大いに活躍しやうとしたがその方針は商業的に墮して植民的でなく、經營機關の中心を遠くバタヴィアに置き、その支應が七ヶ所あるうち印度にはたゞセイロンに一つあるばかりであつたためその領地も次第に英國や佛國のために奪はれてしまつたのである。

いよ／＼英國の東亞侵略史を述べる段になつて來た。前にも述べた如く、英國の東亞侵略の根據地は印度である。印度を侵略した英國は、その豊富な資源と廣大な市場とによつて莫大なる利益を獲得して、當時窮乏の極にあつた英本國の財政を救ふたのみならず、更らに東亞を侵略する資金としたのである。そして英國は印度をもつて東亞侵略の根據地としたのである。



英國が印度へやつて來たのはポルトガルやオランダに比してずいぶん後のことであつた。それは西暦一五七九年のことである。トマス・ステフエンスといふ英人が單獨印度に渡り、印度各地に割據するスペイン、フランス、ポルトガル等西洋諸國の植民地の狀勢を探り、また東方諸國の盛衰、地理、資源を詳細に調査して本國に歸り、印度進出の大いに有望なることを朝野に説き、英國々内に印度進出の熱をあふつたのであつた。この報告を聞いた英國政府は、食指大いに動き、續々と商船隊を編成して政府保護の下に東洋をさして進ませしめたのであつた。これが即ち英國の東亞侵略の端緒である。

ステフエンスの印度探險に遅れること四年、西暦一五八三年にステーブンスといふ英人が、印度航路のポルトガル船に便乗してポ領印度ゴアに渡つた。其處で彼は英國のエリザベス女王から印度のアクバル帝に宛てた國書を携へて印度に渡つたジョン・ニューベリーとラルフ・フィッチの兩使節に邂逅したといふことであるが、彼らの使

命は印度の王に取り入り、そこに進出しやうとするものであることは言ふまでもないことであるから、當時印度植民に全力を傾注してゐたポルトガルとしては彼らの存在を喜ぶわけはなく、従つて彼らに辛くあたり、遂に彼らをゴアから追出したのであつた。かうしてゴアを追はれた三人の英國人は途中非常な辛酸をなめつゝ、ベルコン、ゴルコンダ等を経て遂に目的の地アグラに入り、アクバル帝に謁見してエリザベス女王の國書を呈しベンガル地方の探險を許されたが、彼らは本國へ歸つてその報告には印度開發事業の餘り有望でないことが強調されてゐたといふことである。けれども英國の政府ではそんなことには一向に頓着するところはなく、頻りに商船隊を印度へ派遣したのであつた。

けれども當時の英國の植民政策は全く重商主義に基くものであつて、商船隊の使命も僅かに物資交換を目的とする勢力地帯をつくるに過ぎなかつたのであつた。それは英本國の政治に關係するところもあらうが、主たる原因は當時の英國は海軍力が微弱



にして制海權を掌握してゐなかつたことにあるだらうと思ふ。即ち今日大海軍國をもつて自他共にゆるす英國も、十六世紀の頃には史上に有名な當時歐洲の海を壓するスペインの無敵艦隊のため威嚇されて手も足も出なかつたものらしい。

しかるに天が英國に幸する 때가來た。それは時のエリザベス女王は剛毅果斷にしてスペイン王フィリップ二世の政策に反對し、或はオランダの獨立を援助し、或は慄悍決死の徒を派してスペインの植民地を襲はしめ、また或るときにはスペインの商船を劫掠せしめるなどして、遂にスコットランドのメリー女王を殺したので、フィリップ二世は大いに怒り、西曆一五八八年の七月スペインの誇る無敵艦隊を送り英國に侵襲せしめ、一方かつてのオランダ征討の名將バルマ公を陸軍の指揮官として出征せしめ海陸相合して一舉に英國を屠らんとしたが、時はスペインに利せず、無敵艦隊はイギリス海峡に入つて英國の水師との間に小衝突のみでカレイ港に寄港したところを深夜英國の火船に襲撃され周章狼狽港外に出た。翌日北海に於いて英將ハワード、ドレ

ーキ等と戦つたが、艦體は餘りにも大にして操縦不便なため敵の巧妙な攻撃に備み、スペイン海軍の得意とする敵艦に肉迫して短兵急に攻める戦法を用ゐることができず、また海岸に集結してゐる自國陸軍と連絡することもできず、遂に英國海軍との決戦をなさずしてリスボンに遁走した。かくしてフィリップの雄圖空しく夢と消え、その結果英國は海國たるの地位を獲得しその自覺のもとに海軍力の擴張をはかり、商工業を奨励することになつた。爾來英國は世界美望の的たる大海軍力を利用して海外進出を企て、植民に力を注ぐやうになつたのである。

## 五 東印度會社

北洋にスペインの無敵艦隊を破つた英國は海軍力の擴張をはかり、それを利用して植民政策を盛んに行ひ、所謂武装植民、即ち侵略主義植民を強行するやうになつたのである。そして永年に亘つて求めてやまなかつた東方への進路を得ることになつ



た。かやうに東方に權力を揮ふやうになつた英國は、從來東洋貿易に於いて他國のために暴利をむさぼられてゐた境地を脱することができた。その頃の東洋貿易といへば、前にも述べた如く香料、胡椒、肉桂、キャリコ等であるが、中にも胡椒は歐洲人の生活に必要な缺くべからざるものである故にこれを手に入れるために歐洲人は非常な苦勞をしたのであつた。何故胡椒は歐洲人の生活に必要な缺くべからざるものであるかといふに、恰もわが國の醬油の如く、胡椒は西洋料理の調味料であつて、この胡椒がなくては西洋料理は全く味氣ないものとなつてしまふからである。その胡椒は、南洋や印度に於いて産出され、歐洲では殆んどこれが出来ないものである故に、歐洲人はこの胡椒を求めて東方への進出をはかつたのであつた。ずつと以前から極く少量の胡椒がアラビヤを経て歐洲に輸入されてゐたことがあるが、その時分に胡椒は殆んど貴族や富豪に賞味されるだけであつてまだ一般大衆の口にははいらなかつたのである。ところが十一世紀の末頃になつてあの有名な十字軍が起り、二百年の永きに亘つて東

西の大衝突があつてから胡椒嗜好の習慣は普及して、それが一般大衆の必需品となつたのである。

さて英國が武装植民を盛んに行ふやうになつてからその侵略策が忽ち功を奏し、非常な勢を以つて領土の擴大、植民地の獲得を行ひ、殊に印度に對してはその勢力扶植のために非常な努力をしたのであつた。そして印度に於ける英國の勢力扶植に妨害になるものがあればその驅逐には英國は全力をつくしたのである。

當時印度に於て英國に對する第一の敵は何といつてもポルトガル人であつた。殊にポルトガルはその頃英國が仇敵視してゐたスペインの版圖に入つたために英國の彼らを憎むこと夥しく、氷炭相容れざる敵に統制されてゐるといふ關係からすべての場合にポルトガル人は英國から攻撃壓迫されて、およそ十年間に於てポルトガルの印度に於ける勢力は完全に一掃される悲運に落されたのであつた。

こゝに於て英國は印度に於けるポルトガル人、スペイン人の勢力を除き、多年渴望



の印度に強固な足場を築き、誰れに憚るところもなく印度貿易を行ひ侵略の手を伸ばすこととなつたのである。かやうにして憧憬の地、印度に足場を築いた英國政府は、その植民事業を經營する有力な機關として、ロンドンの富豪を説いて西曆一六〇〇年に半官半民の東印度會社を創立したのである。この東印度會社たるや英國一流の欺瞞政策により、表面は平和的な營利開拓の一商事會社の如く装ふてゐるけれども、實質的には英國の武装植民政策を印度に於いて行はんとする中核機關であつた。即ち東印度會社の背後には擴大された有力な英國の海軍が控へてをり、會社はこの背後の實力を利用して印度大衆はもとより印度に野心をもつ第三國を威嚇しつゝ、印度侵略の歩武を進めたのである。

かうして英國はいよいよ印度侵略に手をつけたが、好事魔多しの譬へにもれず、英國の印度侵略もさう容易に目的を達成できるものではなかつた。いくら英國が武装して印度大衆を威嚇し第三者を驅逐したとしても、その植民事業の經營には何かしら故

障がなければならぬ。即ち英國が東印度會社を創立してから間もない西曆一六〇二年に、英人ランカスターが印度洋上に於いて海賊を働いた事件があつたために、印度人の英國に對する反感が昂まり、英國の對印侵略事業に少なからぬ支障を來たしたのである。

またその前に英國はアフリカに於いてフランスとの間に植民的の覇を争ひ、斷へず政治的確執を生んでゐたため英國の赴くところには必ずフランスが影の形にそぶが如くついて廻つたものであつた。従つて英國の對印侵略政策に對しても、フランスは英國に對する有力な敵手として登場して來たのである。即ち英國のそれに遅れること六年、西曆一六〇六年にフランスは獨創的な植民會社たる東印度會社を創立して、印度に於て英國と覇を争はんとして舞臺に現はれて來たのである。ところが狡猾な英國はこれを逆用して自己の勢力扶植、即ち印度侵略の機會をつかんだ。

その頃の印度は、あの有名なムカール帝國の名王、アウルンゲゼブの治世であつ



て、すべて政治が行きとゞき、國民の生活も安定してゐたし、武力に於てもなかく優れてゐたので、印度をさしてむらがり來る西方の植民隊に對してもよく王の威力が揮はれ植民隊をして露骨にその爪牙を出さしめなかつたのである。それ故に印度侵略の野心を懐いてこゝに來た英國も、その植民事業の敵手として登場した佛國も共に手を伸ばすチャンスをつかむことができず、折角創立した東印度會社の成績も餘り香しいものではなかつた。

かくすることおよそ四十年、その間兩國共に東印度會社の改造をはかることが屢々あつたが、英國の東印度會社ではその侵略的手段を緩めず、寸地たりとも取らうとする努力が不斷に拂はれてゐた。即ち西曆一六〇五年にはホーキンスを、西曆一六一四年にはトマス・ローを使者として印度に遣はし、何とかして植民的據點を獲得しやうとあせつてゐた。そして西曆一六一〇年にはスラット地方に植民地を開いたといはれる。また西曆一六三九年にはチャンドラギリの藩侯からマドラスバダムの地を買ひ今

日のマドラス市の建設に着手し、西曆一六四四年にはベンガルに入つた。

その頃、英國の醫師プロートンがチャハン帝の娘の病を治療した褒美として、西曆一六五一年に通商の許可を受けてゐる。また一六五六年にガンガ河の支流にウグリを建設し、次いでカーリコッタ、即ち現在のカルカッタ市の建設に着手した。それよりカシム、バトナ、バザル等が相次いで英人の手によつて開かれたことになつてゐる。この頃は東印度會社も稍その成績が社會から認められ、植民事業の端緒についたときである。その頃の英國王カロ二世は殊の外この會社に興味をもち、何かと援助を借しまず會社に對して絶大の同情を寄せてゐたのであつた。そして會社に對する免許狀を改めること四回に及び、西曆一六六二年に同王がカタリナと結婚するにあたり、ポルトガルの國王はカロ二世にタンデールとボンベイとを贈つたので、二年後にカロ二世は東印度會社に對してボンベイを與へてその經營をなさしめたのであつた。その頃、英人の印度侵略事業は稍活氣を呈して、印度半島の東海岸のマズリ、ヒプーレー等に



も英國植民地が經營されてゐたが西曆一六八六年にベンガルに於て英人と印度人との間に激しい衝突があり、アウルングゼブ帝はベンガルから英人を追ひ、ボンベイを封鎖し、スラト、マズリ等を悉く奪回してしまつたのであつた。

そこでのいかな英人もアウルングゼブ帝の威力に抗しがたく遂に降伏を誓ひ、僅かにマドラスとボンベイの經營を許されたのであるが、若しこのとき完全に英人を印度から驅逐してゐたならば、印度は今日の如き悲運に泣くこともなく、一方、英國は今日の隆盛を招來することも恐らくなかつたであらう。名王アウルングゼブ帝と雖も這般の事情を看破するの明のなかつたことはまことに惜みても餘りあることだと思ふ。

十七世紀の末に至り印度では國內に印度教徒と回教徒、またはその他の宗教的争覇があり、それを源として政治的にも紛争が起り、ついで外敵トルコとの戦争に破れ、ついでアフガニスタンと交戦するなど内憂外患交々至り、多額の國帑を消費して國民は疲弊を來たし、國政やうやく弛緩することとなり、國內の秩序が亂れ小邦分立の

亂狀を呈するに至り、分解作用が行はれたので、英國の印度侵略に絶好のチャンスと與へることとなり、その對印度武装侵略植民政策に點睛の機會を與へたのであつた。

一方フランスに於ても、この好機逸すべからずとなし、ルイ十四世の信任厚くその放漫政策を以て有名な宰相コルベールは、怪腕を揮ひ、第五回目の東印度會社を起し自らその牛耳を握り、手腕優秀な腹臣を派し、その腹臣に數千の兵を與へてボンデンシユリイとシャンデルナゴルとの兩地に根據地を設けしめて英國の根據地マドラス、カルカッタに對立せしめ積極的に對英挑戰態勢をとらしめたのである。

さきに筆者は英國の對印度侵略策に對してフランスが對抗的態度をとり、英國の敵手として現はれたのを英國は逆用して自己の地盤を築く好材料にしたことについて一言してゐいたが、それは即ちこゝに述べたコルベールの印度に於ける對英挑戰態勢のことであつて、英國はこのフランスの態度をみて密に喜んだのであつた。それは何故かといふに、これまで印度に多數の駐兵をするのによい口實がなく大いに惱んでゐた



のであつたが、この頃になつて印度内地は争亂の巷と化して土匪の被害は頻出するし、今また直接の敵手として現はれたフランスが數千の兵を派して英國の勢力範圍を侵さうとすることになつたため、これを口實として印度に多數の駐兵を決行することが出来るからであつた。

こゝに於て英國は印度に於ける既得權保護に名を藉りて急遽數萬の兵を印度に派しカルカッタにこれを集中した。そしてフランスとの衝突を口實にして小邦藩侯らの弱點をうまく利用し、あるときには藩侯を壓迫し、あるときには藩侯を對立せしめるなどして、いよいよ露骨に侵略の手を打つたのである。

印度が西洋諸國の民をひきつけたのは、さきに述べたマルコ・ポーロの空想にもひとしい旅行記により印度には黄金や珠玉が満ちてゐるといはれたことと、西洋諸國民の生活に缺くべからざる香料や胡椒等の商品に富んでゐることであつた。

そこで最初のうちは西洋諸國の植民隊の希望も、印度が藏する金銀珠玉を得ること

胡椒や香料などの商品をたゞき買ひに安く買つてこれを歐洲に運び高價に賣つて巨利を博しやうといふやうな重商主義に基く營利的のものであつた。それが後日に至つて英國が出現するに及びこれらの財寶を藏し、品物を産出する國土そのものをも奪はんとする侵略主義に轉換したのであつた。そして遂に往昔野蕃人が好んで實行した掠奪行爲を敢てなすに至つたのである。

今日でこそ英國は世界の雄國として傲然と構へ人道主義を云爲してゐるが、十七八世紀頃の英國は一體どうであつたか。英國人の書いた我田引水の歴史によつてこれを調べてみても一目瞭然たるが如く、英國は今日の滿洲や支那に於ける匪賊にも増した野蠻極まる掠奪行爲を印度に於てなしてゐるのである。そして當時の印度駐屯軍にはムガル帝國の遺した壯麗無比な大建築物の内に秘藏されてゐる金銀珠玉の掠奪自由自在といふ奇怪極まる特典が與へられ、これによつてその士氣を鼓舞したといふのだからあされる。勿論、これは一國の統制ある軍隊としては行はれるべき筈のものでは



ないと思ふが、故國を遠く離れて瘴癘蠻雨を冒し命懸けの活動をする遠征軍に對しては、そして利己心が強く、資本主義の風潮に浸り切つた英國の軍隊に對しては、かうした餌を與へなくては或は士氣の沮喪を來たすのかも知れない。この好餌があつたればこそ印度に於ける英國の植民軍が非常な成績を挙げ得たといふ。かうして英國はその印度進出は最も後れたにも拘はらず、十八世紀の中頃から斷然他を凌駕して頭角をあらはして、更に進んで印度の地から競争者を驅逐して完全に印度侵略の目的を達成したのであつた。

## 六 プラシー戦争

十八世紀の初め、フランスは、ルイ十四世及び十五世の國帑亂費のために、財政的の危機に達したのみならず、國亂その他の軍費擴張の必要に迫られたために、その非常時財政を賄ふ手段として、積極的に植民政策をとることになつたのである。その

頃、フランスは印度に於て既にボンゲシエリ及びビヤンデルナゴルの植民地の經營をなし、盛んに英國に對抗して勢力の扶植につとめてゐた。従つて英國との衝突も頻繁にあり、そのために本國に於いてもまた英國と戦端を開くやうなこともあつた位である。西曆一七四〇年の頃、フランスの印度總督、デュフレースはムガル帝國の崩壊に乗じてその機略を働かせて印度に於けるフランスの勢力を伸張せしめたのであつた。ところがこのときフランスは餘りに植民政策に力瘤を入れ過ぎたのみならず、英國その他の國との間に頻々と戦争をしたために植民地經營の負擔と軍費の膨脹とに堪へかねて英國と和を講じデュフレースを本國に召喚することにしたのである。かくてフランスの英傑デュフレースは西曆一七六三年十一月十日の夜、フランス政府にも、またその人民にも顧みられずさびしく逝いたのであつた。あゝ英傑デュフレースの末路のいかにさびしかつたことよ。その末路はまたフランスの印度經營の末路ともなつたのである。



英國がフランスと和を講じたのは西暦一七五五年一月のことであつた。この年有名な印度侵略の主ともいはれるロバート・クライブはセント・ダヴィッド地方代官として任命されたが、これは即ち英國の印度經營に一大進歩を促す劃期的の事件であつた。

當時オランダはセイロン島に據り印度經營をやつてゐたが、それが主として重商主義に墮し植民政策的でなかつたため到底英國の敵ではなかつた。そこで英國はたゞ以てすらに自己の目的達成に邁進するばかりであつた。

その頃印度半島東岸のベンガルに於ける英國人の所領はカルカッタを初めとしバトナ、カシム、バザル及びウグリ等の居留地であつてフランス人のシャンデルナゴールオランダ人のチンストラに比して、はるかに優勢であつた。それだけに英國は甚だ傲慢なところもあつた。その英國の優勢を憎み、これを覆さんとして私かにその機に至るのを待つてゐたものに、時のベンガルの領主スラジユド・ドウラがあつた。彼は暴君であつたといふ惡評もあるが、英國の侵略を防ぐために起つた勇氣は大いに賞すべき

ものがあると言はれてゐる。

西暦一七五六年スラジユド・ドウラは大軍を率ゐて英國人の本據、カルカッタを襲ひ英國人を捕へて黒窖に幽閉した。そのときはたまたま炎熱の候であつたので、英人捕虜全員百四十六人のうち二十三人を残して他は皆黒窖の中で窒息して死んだ。このスラジユド・ドウラ領主の旗揚げは、英國人にとつて非常な打撃であつたが飛報一度ピデツカン地方に於いて交戦に忙しいマドラスの英國人に達するや、クライブは兵を率ゐてカルカッタに歸り直ちにスラジユド・ドウラの軍を攻めてウグリを奪回し領主の軍に大打撃を與へた爲め、スラジユド・ドウラ領主は和を請ふたのである。

かうして領主の軍に勝つたクライブは直ちに鋒をシャンデナゴールに残存するフランス人に轉じた。スラジユド・ドウラ領主は一旦は英國と和したものの決して屈服したものであるのではなく、時至らば再び印度の聖野から英人を驅逐するために軍を起さんと、ひそかに機會をねらつてゐたのであつた。即ち領主はその部下たるミール・デアフエ



ルに命じてカルカッタの附近にあるブラシーに出陣せしめ、一方シャンドンゴールのフランス人に款を通じて兵を擧げんとしたのである。しかるに何たることぞ、領主の命をうけたミール・デアフェルは異心を懐き領主の信任にそむいて英國と結んで王を倒し自らベンガルの領主たらんと野心を起しクライブの軍門に投降したのであつた。勿論クライブはデアフェルを領主たらしむることを彼に約した。そしてクライブは彼れを傀儡につかひフランスの植民地の撤廢をはかり、カルカッタ附近にあつたフランス人の植民地を強制的に英國に譲らしめ、ベンガルの地からフランス人を驅逐する策を立てたのである。

その後、クライブは自ら英兵九百、土民兵二千二百、砲若干を以つてブラシーに進軍しスラヂェド・ドウラの歩兵五萬、騎兵一萬八千、砲五十門の大軍と戦つた。それは實に西曆一七五七年の六月二十三日のことであつた。勿論ミール・デアフェルの内應はあつたのであるが、それにしても二十倍に餘る敵を向ふに廻してよくも戦ひ、且

つこれを破つたものである。そこに何か奇怪な何ものかゞなければならぬ。その何ものかについてには後にこれを述べることにするが、とにかくもこの戦争は有名なブラシーの役であつて、この戦争に勝つたことによつて英國の印度侵略の基礎は完全に成つたのである。クライブ傳の著書マコレーはブラシー戦争の後に英國に黄金の雨が降るといひ、英國にとつて印度の重要さと、英國の印度經營にとつて、このブラシー戦争の有意義なことを強調してゐるのである。

## 七 怪傑クライブの人爲

英國の印度侵略の基礎は全くクライブによつて築かれた。そのクライブとはどんな人物か。彼は幼にして世にも稀なる亂暴者にして近隣の指彈をうけた男であつた。青年期に入り、年齢僅かに十八歳にして海外雄飛の志を懐き、萬里の波濤をもともせず印度に渡つた。そして東印度會社の書記として働いてゐた、生來の亂暴な男のこと



であるからその交友もまた類を以て集まり、英本國を喰ひつめて印度へ舞ひ込んで印度の各地に散在してゐた無宿者達であつた。しかし元來、伶俐な男であつたものだからこれらの無宿者の親分たるの地位に立ち、その率ゐる無宿者を驅使して義勇軍を組織したのであつた。即ちこれは喰ひつめた命知らずの無頼の徒をもつてつり、國家のために生かして使ふといふクライブの計畫である。この無宿者を生かして使ふといふ企ては或は彼の名案といへばいへないこともなからうが、それには大きな弊害が伴ひ印度大衆に大きな迷惑をかけたのである。當時の彼としては、どうせ植民地の土として果てる命ならば、英本國の侵略政策の旗の下に死なう、そして彼の手下に集つた無宿者を大英帝國千年の大計のためにその肥料にしてやれといふ氣持ちで、この無宿者の義勇軍を組織したものだらうと思はれる。

が、もと／＼沒義道なもの、寄集まりのことだから必ずやそこに不善が伴ふことはわかりきつたことである。勿論彼と雖もこれを知らないことはない。けれども、どう

せ他の國を侵略する事だから、一片の良心があればとてもこの事業の遂行ができないに違ひない。だからクライブ自身は既に道徳を沒した性格の所有者であつたらしく、侵略事業遂行の前には印度大衆の迷惑などは一顧の價値もなきものと思つてゐたと思はれる。彼はこの無宿者の一團を煽動するのに掠奪自由、婦女子に暴行を加へることは勝手次第といふ好餌をもつてしたのであつた。それ故に彼の義勇軍組織は忽ちにして成立し、たゞに印度在留者のみならず遠く英本國は勿論のこと、近接の植民地からまでも風をのぞんで馳せ參じてこれに投ずるものがあり、その數およそ五六千にも及んだといふ。義勇軍といへばいかにも立派に聞えるがその本質は無宿者の集團のことであるから、この一團はその實質に於いて權力をもつた掠奪團であり武装した盜賊であつた。

かくて義勇軍の組織成るやクライブはこれをもつて彼自身の手兵となし、東印度會社の幹部と謀り、植民地護衛の任につき更らにこれを中心として各植民地に駐在する



正規軍との聯合軍を編成し、或はブラシーにベンガルの領主スラジユド・ドウラを攻め或はシャンデルナゴールにフランス人を逐ふなど各地に轉戦して功を立てた。けれども彼の部下の軍隊はその指揮官たると、兵士たるとを問はず、皆無宿の食ひつめ者の寄り集まりであり、それは前にも説明した如く權力をもつ掠奪團であり、また武装せる盜賊團のことであるから、その本性を暴露し、被侵略國の財寶は私有たると公有たるとを論ぜずこれを掠奪し、婦女を姦し、寺院堂塔を破壊して暴虐の限りを盡したのであつた。即ち前にクライブの戦功の蔭に何か奇怪なものが伏在するといつたが、それはこのことをいつたのであつて、彼らは決して強いために勝つたのではなく、その物慾を充たし、情慾を充たさんがために野獸的な惡鬼の暴力を揮つたのに過ぎないのである。

そのためにクライブは戦には勝つたけれども、印度人の猛烈な反抗に會ひ統治に困難を來たした。

ブラシーの役が終つて間もなく、當時ベンガルの心臟部ともいふべきガンガ河流域の大地主たちは小邦領主やアフガンの會長らと相謀り、英國に反抗したのをはじめとして幾多の抗英團體がつくられた。このガンガ河流域の地主たちの同盟はバトナの領主ラムナーレンの裏切りにより、英國のために蹶起の事前に彈壓を喰はされその主謀者であつたアラム、テール帝の子アラムはその所領ベハールを喪ひクライブにエミールといふ尊號を贈り、またデアギール即ち采邑を與へることを英國から強要され反英の謀叛を起さないことを誓はせられたのであつた。その頃東印度會社はベンガルの領主に對して巨額の借地料を負ふてゐたが、會社はその勢力を増大すると共に、暴威をもつてこの借地料を踏み倒さんとする計を樹て、その支拂ひを遷延するので、領主はチンスラのオランダ人に援助を求めて英國の横暴をこらしめんとし、オランダ人もそれを快諾した。よつてバタビア總督は軍艦を派してウグリを襲撃せしめたが、何たる不幸ぞ天は正義に味方せず、オランダの軍艦は英國の武装盜賊團のために撃退される



ことになつたため、オランダは西暦一七五九年にチンヌラを英國のために奪取されることゝなつた。

クライブは無宿者をかり集めて義勇軍を組織し、これを驅使して印度に於いて暴虐極まる振舞をなし、印度に於ける英國の勢力を増大しその侵略政策の基礎を鞏固にするとともに、彼自身もこの功により昇進し、また巨大なる財を蓄へたのである。然しいかにも心臓の強い粗暴亂行の彼と雖もやはり郷愁に囚はれるやうなことがあつたとみえ、西暦一七六〇年に一度英國に歸つた。尤も彼は西暦一七五四年とその翌年に英國に歸り、フォックスから立候補して議會の席を争つたことがあつたが、彼に對する英本國大衆の信望が薄く、彼は逐鹿場裡に惨敗して再び印度に渡り、ブラシー戦争と印度侵略に功勞を樹てたのであつた。

彼の印度を去つた後にワンシッタールが來たが、そのとき第二回のガンガ河畔地方の反英同盟團の運動が起り、アラム二世は團員を率ゐてバトナに向ひ、西暦一七六一

年二月二十二日に英軍との戦端を開いたが、不幸アラム二世の軍が敗れてその戦役は局を結ぶことゝなり、アラム二世はベハールに亡命し、そこで再舉を計つたが遂にそれも功を奏せずして終つた。その頃さきに領主を裏切つてクライブの軍門に投じたミール・デアフェルもブラシーの戦後英人の暴虐、横暴に對して大いに反感をもつやうになつたといふのだから、英人の暴虐がいかに甚だしかつたか、その暴状は想像に難くはない。

東印度會社は西暦一七六一年九月十七日にミール・カシムにムールシエドアバトの主權を與へて確認することを條件としてフルトワン・ミドナプールを譲り受けることゝしたのである。ところがこのミール・カシムもまた英人の暴虐に愛想をつかし、遂に反英的思想を懐くやうになつた。

會社は謀略と武力との使分けによつていよいよ侵略の歩武を進め、西暦一七六三年七月十一日にベンガルの領主を説き、さきにカシムが英國に讓渡した土地（フルトワ



ン、ミドナプール、チタゴン)の件につき確認せしめ、これらの土地に於ける諸般の權利讓渡を要求し、且つ領主はその護衛兵を英國に仰いでその經費を拂ふこと、將來ベンガルに於て英國以外の外國人に要塞を築かしめざることを確約せよと強要して、領主にこの條件を承認せざるを得ない境地に陥れたのである。一方カシム領主はその年の八、九月の頃にセリアに兵を擧げ英國の武装盜賊團と戦つたが戦利あらずして惜敗した。更らにその翌年の十月二十三日に、バナレスの東北に位置するブクサル地方にも反英の亂が起り英國の將、マンローがこれを討ちガンガ上流の地を全く併呑してしまつたのである。その結果、ウードの領主もまたアラム二世も英國との和解を餘儀なくされたのであつた。

西曆一七六五年の五月、クライブは再び印度に來り、直ちにベンガルの領主チャフェルに甚だしい壓迫を加へて領主の年收全部を取上げ、その代り五百三十萬留比の年金を與へるといふことにしたのであるが、この五百三十萬留比の金の使途に關して

も、會社が選んだ印度出身の三人の大臣をして掌らしむるといふ會社に都合のいゝとり決めたのみならず、その翌年領主が死するや、その弟は十四歳の少年にして領内の政務をみる能力のないのをよいこととして、英國はアラム二世を壓迫してベンガル、ベハール、オリッサの三地方の財政權を掌中に收めたのであつた。それ故に領主存命中に締約した五百三十萬留比の年金も一文も拂はずしてすんだばかりでなく、その後、間もなく會社はサルカルの地を獲得し、その勢力圏を益々擴大したのであつた。

かくいへば英國は濡手で粟をつかむやうな幸運に恵まれたやうであるが、半面には英國の暴虐に對する印度人の反感は昂まるばかりであつた。或るときは如きはクライブは『毒を喰はゞ皿まで』と自暴自棄の決意をなし、印度に於ける實權を收めたのを奇貨として鬼畜も顔をそむけるやうな暴壓政治を行ひ、傲然として印度大衆に臨んだため、印度大衆の間には彼に對して反感をもつものが多くなり怨嗟の聲は地に充ちた



のであつた。そこで印度在留の英人の間にも彼の暴狀を本國政府に報告するものが出て来て、遂に一時英本國に於いて議會の決議により彼を本國に召喚して印度人の反抗を緩和する策をとつた位である。

クライブは西曆一七六七年、病にかゝり職を離れて本國へ歸つたが、英本國に於ても彼の印度に於ける暴狀と、彼自身が巨萬の富をなしたその裏面に伏在する悪業とを攻撃する聲激しく、そのために彼も快々として樂しまず憂鬱な日を送つてゐたが、西曆一七七四年十一月二十一日、過量の阿片を喫して自殺したのである。

これは彼の良心の目ざめにより、彼と雖も自己の印度に於ける暴狀に對し責任を感じて自決したものであるといふべきである。英本國に於いてすら、世論はクライブの印度に於ける暴狀を攻撃する程に彼は暴政を行ひ、印度を掠奪搾取したのである。即ちクライブの人爲は亂暴の二字につき、彼によつて確立された英國の對印度政策はまた暴虐の二字につきる。

かやうにして當時「持たざる國」であつた英國は印度を侵略したのである。クライブの暴狀はよく英國の印度侵略の狂暴振りを象徴するものであるといへやう。

## 八 英國の印度併合

クライブが暴力をふるつて印度の大衆を畏怖せしめ、その侵略の目的を遂行したる際で英本國は大いに興隆に向ひ、印度の産物によつて英本國に黄金の雨が降る繁榮時代が到來した。クライブのやりかたは夜盜にもひとしい掠奪的なやりかたではあつたが、當時「持たざる國」英國としてはそれも或ひはやむを得なかつたかも知れないと辯明する者もある。いづれにしても印度を手に入れたそのときに、英國は他日の輝かしい興隆が約束づけられたのである。

クライブの時代には英國の東印度會社は印度に於ける財政的實驗と兵馬の權とを完全とその掌中に收めてゐたのであつたが、その他の行政及び司法の權は依然として領



主の手に残されてゐた。それが會社の印度經營に少なからぬ邪魔になつて來た。

クライブが印度を去つてから、ウエレルスト及びカーチャーの二人の東印度會社の代表者の時代を経て西曆一七七二年に、惡辣な手段を弄して印度侵略をやつたことによつて有名なワールン・ヘスチングスは、ベンガルの知事といふ名目の下に東印度會社の全權代表者として印度に來任した。彼は着任後直ちに行政、司法の權を領主に委ねておくことが會社にとつて不利なることに着目し、これが矯正に大いに努力するところがあつた。

西曆一七七三年に英國は印度管理法（憲法）を制定して印度に總督を置くこととし、その諮問機關として五名の評議員を任命し、評議員會を設けることとして對印度政策の大改革を斷行したのである。しかし、クライブ以來の英人の對印度暴虐に對し

て、鬱然としてゐる印度人の對英憤懣は、制度の改革位によつて霧消するものではなく、すでに救ひ得ざる迄に混亂の狀を呈してゐる當時の印度の行政の實狀であつた。のみならずヘスチングスは、クライブと同じく英人の權利を擴大強化することに熱心であつたから、彼はクライブの用ゐた暴虐極まる武斷政策を踏襲して、今は無力にして全く英國の傀儡化してゐるムガル帝を擁し、土人の蜂起を鎮定することに藉口し印度の愛國運動者に彈壓を加へ、土匪の討伐に名を藉りて利權の奪取につとめた。故に印度人の反英思想は益々増大し、その手は燎原の火の如く全印度に廣まつたのであつた。その結果、西曆一七七八年より三年間に亘る第一回マラーッタ戰爭が起り、西曆一七八〇年より四年間に亘る對マイブールの戰闘があつた。

かくの如く彼はクライブのそれにも劣らぬ惡虐非道の手段を弄して印度の侵略を敢行した、め諸外國の惡評をかひ、本國政府に向つて反省を促す報告をなすものも出て



來たのであつた。けれども本國政府としても、もともと印度侵略の國策の下に對印度政策を樹てゝゐるのだから、こんな報告に耳を傾けやうとする風がなかつたのであるが、本國に於いても民衆の中にはヘスチングスの極悪非道な暴壓と掠奪行爲に對して強く非難するものもあつて、その前途豫斷を許さざる情勢を生じるに至つたので西曆一七八四年老ビット内閣ではこの非難を緩和するために東印度會社制度改革といふ彌縫手段をとり、これを議會にはかりその協賛を経て東印度會社の本社を本國に移し、管理局を新設して文事祕書と出納大臣、國務大臣の六名よりなる監督官を置き、會社の無軌道的進出と暴壓政行を監督せしむることにしたのである。

しかし印度とロンドンといふやうに距つてゐて、しかも交通の不便なその當時のことであるから、この新制度に對して充分な効果を期待することは絶對不可能のことである。一事件に關する請訓に對して指令を出すとしても、その往復に少なからぬ時間がかゝることであるから、その請訓に對する指令が印度に到着する頃にはすでに萬事

終了のあとであつて、この監督官制度は全く有名無實な空文に過ぎなかつた。だからこれによつてヘスチングスの無軌道的な侵略と暴虐行爲とを抑制することが毫も出來ず、彼は益々暴虐と掠奪とをつゞけ夜盜的行爲によつて年一年と收益を増大し、領地を擴張すると共に私腹もこやした。しかし天はいつまでも夜盜の横行を許さず、遂には彼の頭上に制裁の鐵槌が下るときが來た。即ち彼は英國議會の人道的輿論の彈劾を受けて、西曆一七八五年印度大衆の怨嗟の聲に送られて印度を去つたのである。彼の行爲もまたクライブのそれと同じく英國の狂暴な印度侵略政策を象徴するものであることは云ふまでもない。

以上述べた如く英國の印度侵略搾取は實に狂暴極まるものであつた。その暴虐非道の跡は吾々をして顔をそむけしむるものがある。

さて、それではなぜ英國はかうした非道な行爲をしてまで印度を搾取しなければならなかつたか。それについて一通りのべることにしやう。



當時の英國は國勢膨脹時代にあつて、スペインや佛獨等の隣接諸國との間に戰爭をつゞけ國帑大いに費消され、これが補充のために植民に努力したことがまづ考へられるのである。つぎにはスペインの無敵艦隊を北洋に撃滅してから、その餘勢をかつて獲得した廣大な領地の維持經營とその保護のために海軍の擴張、即ち軍艦の建造費のかさんだことなど、英國の印度及び印度を根據とする東亞の侵略擄取に力こぶを入れる大きな原因をなしてゐることは否定できないだらう。

更らに英國は新たな植民地北米に對して、本國の商工業を保護する目的のために他國との通商を禁じたり、印紙條令を發布して商取引、訴訟、不動産の賣買等の契約書に印紙を貼用することを命じたり、更に茶、紙、玻璃、銅、繪具等の輸入品に課税したりなどして苛斂誅求の政策をとつたために、北米植民地の大衆の反感を招き北米の物情は騒然となり、遂に西曆一七七六年の北米の獨立運動とまで發展し、英國はこの運動を抑壓するために政府が使つた争闘費、しかもそれが英國の對策が失敗に終り、

北米は獨立した爲めに全くの空費に終つたのみならず、北米の獨立により永年北米の植民に投じた莫大な資本が空費になり大損害を蒙つた爲めに國內は大不況に悩み、その苦境から脱するために英國は印度に於て暴政と狂暴的擄取とを敢行したのであらうと思はれるのである。

英國は國家財政の危機に直面し、この危機を打開するために選んだ方針は植民通商の發展により國富の蓄積をはかること、植民地の大侵略により富の増大をはかることであつた。そしてこの方針を具體化するために、未開瘴癘の地たる植民地開拓勞役につかふのだといふ理由で、狂暴な犯罪により長期の就役に處せられた囚人を植民地に送つたのである。そしてこれらの囚人を使ふのに莫大な物質的好餌をもつてし、彼らの好むところの掠奪や強姦等を公然と許して所謂泥棒政策をとつたのである。印度に於いて殊にそれが甚だしく、さきにも述べた如く英領印度帝國の建設者たるクライブは義勇軍といふ美名の下に武装盜賊團を組織してそれを手兵とし、後年彼は自責の念



に堪えず自殺するに至る程のひどい暴虐政策をとつたのである。かくまでして英國が何故侵略政策をとらねばならなかつたか。その間の事情をなほ一層わかりやすくするために、こゝに當時の英國の經濟財政等について一瞥することにしよう。

英國は十七世紀の初期に於いて政治的に中央政府の基礎が定まるとともに、多年に亘る對外抗争により萎微してゐた國民の經濟も徐ろに回復することになつた。こゝに於て從來の王室財政は國家財政へと移行することになり、これまでの武斷政治とは異なり、經濟財政政策が國家政治の中軸を占める現象を呈するに至つたのである。そのため從來王室財政の經營管理にたづさはつてゐた政府の財務官が、こんどは國家の財政の經營管理にあたらねばならぬことになつたので、その事務に習熟せず少なからぬ苦心をしたのである。

そして政策の過誤と技術の拙劣から生じた難問が累積するといふ香しからの結果を

招來した。

西曆一六二八年頃、英國に於ては憲法政治が非常に發達し、これ迄國王の手にあつた課稅權も議會に移されることになつたから、これまでの如く金融業者や財務官の自由に財政や經濟を處理することができなくなつた、これまでは英國に於いては國民金融の權は殆んど貴金屬商の手に獨占されその權能もまた絶對的のものであつた。貴金屬商はその保藏する貴金屬類を背景として、一國の宰相も遠く及ばぬ程の絶大な經濟的信用と勢力とをもち得てゐたのである。それだから一般の民衆はこれまでの内亂、國際的戰爭等の體驗により、自己の財寶を國家の保管に託するよりも、寧ろ貴金屬商に保管を託する方が最も安全な途なりとまで過信するに至つた。

かくの如く貴金屬商の信用と勢力が増大するにつれ、一般國民のこれに財寶の保管を託するものもその數を増加して來たので、その金額も累増して來た。これまでは貴金屬商は財寶の保管をとつてこれを預かつてゐたのであるが、これをたゞ保管するだ



けでは僅かに保管料をとるだけの利益しかないが、これを流用して金利をとることにすればその利益も數倍することだらうといふ觀念が彼らの間に擡頭し、直ちにこれが實行に移されることになつた。そして貴金屬商は益々財寶を集める必要に迫られ、その財寶を集める手段としてこれまでとつてゐた保管料を撤廢するのみならず、更に國民より保管を託された財寶に對して利息を支拂ふことにしたから、一般國民は狂喜しこれに眩惑されて舉つてその財寶を貴金屬商に寄託したので、貴金屬商の信用とその財政勢力は益々増大したのである。十七世紀の末にはその信用と勢力とを背景として手形を發行する習慣をつくり、遂に私製手形時代を現出することになつた。

十七世紀の中頃には英國に於て民權が非常に發達し議會の勢力は王室を壓し、王室と議會との對立を生じ、遂に有名なクロムウエルの共和政治時代までも現出するやうな事態にまで發展したことは歴史の示すところである。かくの如く民權の發達するに従ひ、それと反比例して王室の勢力は日々に衰微の道程をたどり、西曆一六六〇年

に王政の復古が行はれたけれどもその勢力は萎微不振を極めそれは到底昔日の比ではなく、政治、財政の實權は議會の掌握するところとなつた。従つて王室の財政は頗る衰微し到底その支出をまかなつて行けなくなつた。そこで王室では恰もわが國に於て明治維進前に各藩の大名らが住友から多額の金を借入れた如く、貴金屬商から多額の融通をうけて王室の財政難を彌縫したのであるが、遂にそれが極端に行詰り、支拂不能に陥つてしまつた。その餘波をうけて貴金屬商の破産するものが續出し金融の大悲劇を現出した。その影響をうけて貴金屬商に財寶の保管を託してゐた一般國民の、産を失ふものが續出して、日々ロンドンに數千の破産者が出て大恐慌を來たし、それが全土に波及して國民の王室に對する怨嗟の聲は巷に滿ち、國內は恰も鼎の沸くが如く物情騒然たるものがあつた。

こゝに於て王室を繞る政治家が重大なる經濟危機から國家を救ふために、鳩首協議



を疑らしその對策發見に腐心した。その結果、如何なる犠牲をはらつても積極的に植民政策を行ひ、國家を經濟的危機から救ふための資財を獲得することに努力しやうといふことになつたのである。そして英國政府では焦燥の餘りこれまでの如く生温るい重商政策ではなく、急進的な植民地奪取政策をとり侵略と掠奪を盛んに行ひ、速かに財寶を獲得しやうといふことに重點をおくことになつた。

一方國內の施設としてはこの恐慌にかんがみ、財界バニツク匡救對策として國立銀行を設立して國家金融の中心機關とした。そしてこの國立銀行の設立により財政々策の確立をはかり、財界のバニツク匡救の對策を講ずると共に、これを利用して國債を募集し植民地侵略の國策遂行に必要な資金を集めやうとしたのである。だからこの銀行はいはゞ國策遂行の中核機關といふ觀を呈することゝなつた。そして政府は銀行が國幣を献金するといふ條件のもとにこの銀行に對し英本國及びその領地内に於ける經

濟的大特典を與へた。

ところがこの對策にも幾多の矛盾と弊害とが包藏されてゐて坦々たる道を行くが如く、容易に國策を遂行することができなかつた。即ちそれが次に植民會社破算事件といふ重大な事件を惹起し、再びひどい財界バニツクを招く因子となつたのである。

過去一世紀の間に數回の財界の危機に見舞はれた英國は、その苦い經驗によつて大いに刺戟され危機打開の對策とする植民政策をいよゝ盛んに行ふやうになつた。この氣運に乗じて英國の企業熱は鬱然として起り、猫も杓子も植民地進出を口にし且つ企圖するやうになつた。中にもアメリカへの進出熱はすばらしくこの情勢に對應する策として政府は、恰も印度經營に於ける東印度會社の如くアメリカ進出の機關として南海貿易會社の設立を企てた。

この會社に對する人氣はまたすばらしいものであつて、西曆一七一一年に未曾有の



盛況裡にそれが設立されたのである。この会社の設立にあつても國家はそれをアメリカ進出の國策遂行の中核機關たらしめたことはいふまでもないことで、さきに國立銀行を設立したときと同じく会社は國家の財政的危機の打開を援助し、英國興隆の基礎を建設する任務を負担することを設立條件として、その設立を許可したのである。即ちこの会社に對して政府は太平洋貿易の全權を與へる代りに、会社は軍費その他國家の費にあてるために國富の増大をはかり、財政匡救の目的をもつて政府が發行した臨時公債を買入れることを要求されたのである。

かくして設立された南海貿易会社は約十年間は無難に經營されたが、西曆一七二〇年に至り英國の國家財政は極度に行詰りその負債額は三千萬ポンドといふ當時としては實に尤大な負債をつくり、殊の外の窮乏に見舞はれたため、政府は窮餘の一策として當時植民熱の旺盛なるを幸に、南海貿易会社に對し此の負債の整理を引受させるべく提議したのであつた。然し幾ら植民熱が旺盛風潮に幸され、それが國民的支持をう

て惠まれた環境にある南海貿易会社と雖もこの政府の提議を轉呑には引受けるわけはなく、また政治的にこれをみても國策会社に過重の負擔をかけることは決して好ましくないことではない。だから議會に於ては多數の政治家が、また会社の方では多數の株主がこれに反對して重大なる事態を生まんとしたが、結局つぎのやうな條件を以てこの政府の提議を容るゝことゝなつたのである。

一、南海貿易会社は國費に充當するため七百五十萬ポンドを政府に献金すること。  
一、國債の所有者は南海貿易会社の株主たることを得、会社はその國債を株券に振替へること。

一、南海貿易会社は國債株券に振替へる代り、政府は同社に對して英國の海上貿易の全權を與へること。

この案は幸ひにも議會の協賛を得て直ちに實施され、英國政府は財政的危機から一時救はれたが、このことにより英國の植民政策は國策的公共性を喪失して營利を追求



してやまない民間企業性格を帯びてきたことは看過できない現象である。

かくてこの南海貿易會社の傘下にある東印度會社をはじめ群小貿易植民會社は英國政府の擁護のもとに、またその大海軍力の保護を背景として世界の植民地に乗出したのである。それはずつと後年のことであるが、英國は他の雄國から阿片の害に關して抗議をうけたとき、それは民間の營利會社のなしたことであつて英國政府の關知するところではなく、従つて政府は責任をとるべき筋合のものではないと回答したことがある。けれども今こゝに南海貿易會社と政府との關係をみると、それは形式的には一營利會社の行動であるとはいへ、實質的には英國政府の高等政策より出たことであることが明瞭である。假りに一步を譲つてその直接の罪は政府にないとしても、その非合法行爲煽動の罪はこれを免れることはできないだらう。

それはとにかくとして、印度、いや東亞の寶庫を手に入れた東印度會社の上に、親會社として臨んでゐる南海貿易會社の業績はすばらしいものであつて、その株價は昂

騰の一途をたどり、西曆一七二〇年には一株二千ポンドまで昂騰したのであつた。この一事を以てみても如何に南海貿易會社の業績の好調であつたか、想像がつくのである。

さて、かやうに南海貿易會社の業績が好調を示すにあつて、一般大衆はこの會社の株式を渴望しそれを手に入れやうと策動することは今更いふまでもないことである。従つてこの會社の株を手に入れることはながく困難であつて南海貿易會社の株を手に入れることができないとすれば、せめて植民事業を目的とする他の會社の株でも買ひたいと望むのが人情である。この大衆の動向をつかみ、國民大衆の植民熱の白熱化した波に乗つて植民會社の設立を企てるものが群生した。そして遂に雨後の筍の如く數百の泡沫植民會社が簇生するといふ弊風を招來した。しかもこれらの泡沫會社は植民事業の盛況に熱狂する大衆の輕卒な投資により皆好況裡に成立したのであつた。

こゝに當時の英國の植民事業の不健全さがあり、後日そのために財界のバニツクを



來す禍因がつくられたのである。

餘談はさておき、かくの如く植民事業に關聯する泡沫會社が簇生する情勢をみて、政府の大官や南海貿易會社の重役は眉をひそめた。それはかうした不健全なる企業界の現象により植民事業界の不健全を益々増大し、憂ふべき事態を生ずるからである。そこで南海貿易會社の重役は政府に建言して、國王に上書させ、西曆一七二〇年七月泡沫會社の取締令を布告させたのであつた。一度この取締令が布告されるやこれにひつかゝる會社は後から後からと續出し、一波は萬波をよんで植民事業會社の破産、または滅亡するものは踵を接して出來たのであつた。ところがこゝに最も憂ふべきことは、これら泡沫會社の投資者は決して富豪や財閥らではなく、中小商工業に従事する國民大衆であつたことである。

即ちこれら國民大衆の投資した會社の破産は直ちに彼ら國民大衆の破産を誘發したために、政府や南海貿易會社に對する怨嗟の聲は巷に滿ち、甚だ憂慮すべき事態を生

ずるに至つた。そしてそれが更らに植民事業の投機的風潮發生の誘因をなして南海貿易會社にも大いに影響し、その株式はつるべ落しに下落し一會社の破産する毎にこれと比例的に暴落して、二ヶ月餘にして一株百七十ポンドといふ慘落の情勢を生んだ。これを約言するならば、南海貿易會社の重役が泡沫會社の取締令布告の建言をなしたことは、結果に於て自繩自縛になつたことなる。

かくて南海貿易會社の聲價は地に墜ちるに至り、それはまたこれを以て國家主要の財源とする英國政府の財政策にも支障を來たし、更に、それが他の植民事業會社にも影響を及ぼし、それらの植民會社の大株主たる國立銀行にも飛火して、その危機が叫ばれることになり、曩のそれにも増して大恐慌を生んだのであつた。このパニックに直面した英國政府は大いに周章狼狽し財界の有力者を糾合して財政的難局打開の對策を得べく鳩首協議した結果生れた對策、それはたゞ侵略的植民政策の即時斷行の一事あるのみといふことであつた。さきに述べたロバート・クライブの武装盜賊團の組



織、ワーレン・ヘスチングスの狂暴は共にこの英本國財政危機を救ふために案出された侵略政策を如實に遂行したまでのことに外ならない、といふことに歸結するのである。

話はまたもとに戻る。ワーレン・ヘスチングスが本國議會の彈劾をうけて印度を去るや、その後をうけて西曆一七八六年コーン・ウォリスは印度に來任して、ヘスチングスの武斷政策を踏襲して幾つかの侵略戦争を起し、マイソール王チツプサヒブを攻めて降伏せしめ、また田制を確定したのであつた。西曆一七九三年、ウォリス去るや、ジョン・ジョーア來任して西曆一七九八年まで印度に留まり、その後ウエルスリー卿が來任した。

ウエルスリー卿が任につくとすぐ、彼は印度からフランス人の勢力を驅逐することに着手した。さきにフランスはジュフレースを召喚して英國と和を講じたのであるがフランスの武將ビュジューは尙ほもデツカンに留まり、マラーッタ、マイソール等の領

主を味方としてフランス勢力の最後の一線を守り、それにより印度にフランスの勢力はいくらか残存してゐたのであつた。たとへそれが勢力不振の微々たるものであつても、印度侵略の旗印のもとに邁進しつゝある英國にとつては確にそれは眼中の埃であつた。何とかして、これを驅逐しようとしてこれまでの東印度會社の代表者、または印度總督も考へたところではあつたが、印度人領主らとの衝突その他の事件が頻發したためにそれに忙殺されて、フランス人の勢力驅逐にまで手が出せなかつたのである。

ウエルスリー卿の時代になつて印度の領主らとの折衝がやうやく閑になつたので、この際にとばかりにフランス人の残存勢力を印度から驅逐することに着手したのである。また彼は本國政府の侵略政策を忠實に遂行し、マイソールの回教徒國に兵を向け、これを討ち滅ぼし、スラト、カルナチック、タンデオールの王朝を殲し、ウード、ニザム、ベシヨウ、ボンヌラ、シンヂア、ホルカル等の領主の領地を奪取して會社の所領を倍加したのみならず、ボンベイ、マドラスの英國の領地を擴大し、カルカッタ



の英國領地をデリーまで延長した。またムガル帝を全く傀儡化してこれを頤使用するなど、印度全土は恰も英領になつたかの觀を呈するに至つた。

かくの如くクライブ、ヘスチングスと共に思ひ切つた侵略政策を行つたけれども、一方に於て彼は教育の隆盛をはかり人材の養成につとめたから、比較的印度人に歡迎された方であつた。

西曆一八〇七年に、ウエルスリー卿が印度を去るや、その後に来たのはミント卿であつた。卿はあまり活躍しなかつたが、西曆一八一四年に卿の後へ來たヘスチングス侯は印度に在任することおよそ十年にして、その間、相當に侵略的手腕をふるつたのである。即ち彼はまづネパール國の侵略をはかり、ネパール王をしてその領地を割讓せしめた。

また、かねてより英國の狂暴な侵略政策に對して不満を懷く印度人は人種の別、宗教の別を超越してピンダースといふ團體をつくり、デツカンの西北、アルタの高原に

據りマドラスとボンベイとの間を騒がせた事件があつたが、ヘスチングス侯はその討伐を行ひ、西曆一八一七年十一月に討伐工作を終了したのである。更に印度の領主、大地主の反英分子がマールラッタに本據を置いて反英同盟を結成したが、これもまた彈壓に遇つて解散を餘儀なくさせられたのである。

かくの如くにして、ヘスチングス侯の時代までに英國の印度侵略はその大半に及んだのである。

ヘスチングス侯について、西曆一八二三年、アンハースト卿が來たが、このとき印度の東にあるビルマが、アラカンとの間に戦争を起し、それに大捷してアラカンを併合した。それに不満をもつてアラカン人は英國にすがり印度に亡命したので、ビルマ王は時の印度總督アンハースト卿に對してアラカンの亡命者の引渡しを要求したのである。ところが侵略的意欲の旺盛な英國は何でこの要求に應じやう。何か口實があればビルマにも兵を送つてこれを侵略せんと待ち構へてゐたところへこの事件が起つた



のだから、好期到来せりとばかりに英國はほくそゑんだのである。それとは知らぬビルマ王は國內統一に成功した餘勢をかつて印度に對し挑戦したものであるから、英國は直ちにこれに應戦して兵をビルマに送り、ビルマをして和を請はしめ、その南方の領地及びアラカン・アッサムを割讓せしめたのであつた。而して卿がビルマより奪取したビルマ南方の地方に卿の名を冠して今日その地方をアンハースト州と呼んでゐるのである。

更に彼はシンド、ラホールの兩地方の侵略も完了し英國に對しては大いに功を樹けたのである。

彼の後、數代の總督を経て西曆一八四八年にダルハウジイ卿が來任した。ダルハウジイ卿の時代には、まづシツクを平け、バンジャツブを併呑し、東の方のビルマに對しても、ビルマ王は英國の忠告を容れずして英國の植民政策上の仇敵たるフランスに鐵道敷設權を與へたといふのを理由として征討の軍を送りビーグ地方を奪つた。また

ウードに對しても兵を送りその領土を奪取して會社の領地擴張工作を進捗せしめたのである。こゝに英國の印度侵略工作はまづ大成したといつていいだらう。

彼は一方武力を揮つて侵略すると共に諸般の改革をはかり、交通、商業等の發達に努力したためこれらの點にその功の見るべきものは少なくはなかつた。けれども彼は宗教を印度侵略の具に利用せんとして基督教の傳道に力をそそぎ、印度在來の宗教に對して非常な壓迫を加へたため印度人の反感を招き、彼が印度を去つてから一年後、即ち西曆一八五七年に印度人は驟然起つて宗教擁護の亂を起しまづデリーを陥れ、カウンプルの領主ナナーサヒブも印度人の軍に加擔したため亂は大いに擴大し、ラクノー、ウード、ベンガル、バンヂャブ等にも波及し容易に平定されなかつたが、英軍にもハヴロック、アウトラム、カメル等の諸將が出て西曆一八五九年の一月漸くにしてこれを平定したのである。

この亂により英國は大いに啓發されるところがあり、また東印度會社の弊も分明し



たのでこれを廢することとし、印度政府改良法を制定してこれにより印度統治權を英國政府に移し西曆一八七七年一月一日、ヴィクトリア女皇は印度女皇の位に就いたのである。

こゝに於て英國は完全に印度を併呑した。ところがこれをもつて未だ満足せず、印度を自己の東洋に於ける勢力發展の根據地となし更に進んでビルマ、南洋諸島を侵略し、遂に支那にその侵略工作を延長したのである。

## 九 英國のビルマ併呑

ビルマ人はさきに二回に亘る英國との戦争に敗れ、その侵略の災を受けてからは極度に英國を嫌ひ、英國人を呼ぶのに洋犬といふ侮蔑の言葉をもつてした位である。

かくの如くビルマ民族が英國を嫌ふ感情はビルマ在留の英人に反映し、ビルマ王室ではとかく英人に辛くあつた。

それに反してビルマはフランスと友好的關係を持續し、ビルマ國內に於ける資源開發の特權をフランス人に與へてゐたのである。それを英國は嫉視してやまず、折あらばビルマに思ひ知らしてやらうとその機會を待ち構へてゐたのであつた。そのときビルマ政府は英國の商社、ホンベイバーマ商事會社のチーク材輸出に對し二百三十萬留比といふ巨額の税金を課したので、英國（印度政府）は直ちにこれを外交交渉に移したがビルマ政府の拒絶に遇ひ、遂に西曆一八八五年十月に最後通牒をビルマ政府に送つた。けれどもこれもまた拒絶されたばかりではなく、ビルマ政府から國內在留の英人を追放するといふ強硬な聲明が發せられたので、同年十一月の半ば、英國がさきに奪取した南方ビルマに駐屯する軍隊を陸軍大將ブレンダーガスト及陸軍大佐スレトデンの指揮のもとにイラワディ河を北上せしめ、同月二十八日の朝、當時のビルマの首都マンダレー市に上陸し、翌二十九日の夕、ビルマ國王テイポウミンをして降伏を誓はせたのであつた。



そこで英國はビルマの國王をこのまゝにしておいては後日面倒な事が起らぬとも限らない、それを防ぐには國王を國外に放逐するに如かずとなし、ビルマの國王に二人の皇后を伴はさせて、同年十二月三日、汽船ツリヤ號に乗せてビルマを立たせ最初はラヂベトに流しついで印度の西海岸にあるラトナギリ島に流したのであつた。こゝに於いて英國はビルマ侵略の工作を完成し印度帝國にこれを合併したのである。

以上述べ來つたところにより筆者は英國の印度侵略の歴史を概略説いたつもりであるが、さて、それでは英國が印度を併呑した後、印度はどうなつたのだらうか。英國は果して印度人に幸福をもたらしただらうか。印度を樂土にしただらうか。筆者はこの問に對してたゞ一語「否」と答へるのみである。

さきに述べた如く英國は自己の財政窮乏を救ふ手段として、財界バニツクの難局を打開する方法として植民地の侵略を、また掠奪をやつたのである。だから印度の富を

本國に移すことが英國本來の目的であり、そのためには英國はあらゆる策略を用ひてゐる。その印度搾取の方法は決して人道的ではない。それは権力によつて合理化されてはゐるけれども、明かに掠奪詐欺等の非人道的のものである。この點に關しては筆者はわが國民の誰れもが今少しく知つてゐてもらひたいものだと思ふ。そこで英國の印度搾取の實情をつぎに敘述して讀者諸彦の清鑑に供することにする。

## 一〇 印度搾取の跡

かくて英國は遂に印度侵略の工作を完成した。そこで英國は當時極度に窮してゐた自國の財政的難局を打開するために印度の富を掠奪することをはじめたのであつた。勿論英國は植民地侵略の國策に基いて廣大な新附の植民地をもつてゐたのであるが、印度を除いた他の植民地は殆んど未開の地であつて、これによつて利益を得るどころではなく、却つてその開發のために巨額の投資を必要とし、そのために本國財界に



過大な負擔を課して、財界の危機を更に激化させたのであるが、印度はそれらの地とは全く異なり、當時すでにその産業が非常に進歩してゐて、非常に富裕な國であつた。だから西洋諸國は、印度との通商によりその物資を得やうとして努力したのであつた。その結果はバスコ・ダ・ガマの印度航路發見となりコロンブスのアメリカ新地の發見となつたのである。

今日吾々の目に映ずる印度は未開の非文化國であつて、世辭にも文明國とはいはれないが、昔はこゝはすばらしい文化國であつて、農業は勿論、建築、美術、工藝等が非常に進歩してゐた。印度内地にその輪奐の美を輝かしつゝある。印度人の手によつて出來た無數の壯麗な、そして巨大な建築物が當時の豪華な印度文化の跡を物語つてゐるのである。また昔、西洋人の渴仰の的となつた絹の絨氈、金糸、銀糸の縞模様、の燦として輝やく縞子、精巧をつくした刺繍を配したダツカのモスリン、その他印度更紗等の奢侈品は皆こゝで製造され、且つ輸出されたのであつた。のみならず、當時

印度の綿工業の發達してゐたことはまた驚く程であつて、英國に於いてミュールといふ紡績機が發明されたとき一封度の綿をもつて三百五十枷、それを長さによれば百五十哩の糸を紡ぐことができたといふのであるが、印度では當時すでに機械の力をからずとも同量の綿を以て百十九哩の長さの糸を紡いでゐたのであつた。これによつてもいかに當時の印度の綿工業が發達してゐたか、窺はれる。

印度文化が瞭爛たる光輝を放つたのはアッパール帝の孫、ジャハン帝の時代であるが、今日まだ印度の都市々々に残存してゐる壯麗にしてまた巨大なる建築物等はこの時代にできたものであるといはれてゐる。

その工事の模様について記録の示すところによれば毎日五千人の人夫を使役し一千万留比の國幣を投じ十四年の歳月を費して完成したといはれてゐるジャマ、マンド院、アクラにある壯麗無比なタジ、マハルその他國內到處にあるムガール帝國時代の遺物により吾々はムガール帝國時代の文化の豪華さを偲ぶことができるのであるが、その



當時の富裕さもまた窺ふことができるのである。

また印度帝國の隆盛時代のオーランゼブ帝治下の西曆一六九五年の國庫總歲入は十二億留比であつたといふし、西曆一六九七年のそれが十一億六千二百五十萬留比であつたといふのだから、いかに印度が富んでゐたかを知ることができやう。

當時の印度の農村は百エーカー乃至一千エーカーの農耕地をもつ村がこの土地の共同耕作をして、その生産物を分配して村民の需要にあて、餘分のを賣出し（納税もまた農作物をもつてこれに充てゝゐた）一方工業によつて綿糸布を生産して自家の用にあてるといふにも國家の工業發達に寄與してゐたのであつた。だから頗る平穩無事であつて幸福な日を送つてゐたのであつた。

ところが一度英國が印度を奪取するやその工業は根底から覆へされ、恰も燒野原のやうに荒されたのであつた。

元來英國は海賊をその主業とした國であつて、印度を侵略するまでは實に貧乏な國であつた。ところが例のクライブがブラシーの戰に印度軍を破つてから公然と印度の富を掠奪しはじめ、それを英本國へ送り且つ資本として英國の産業の發達の基礎をつくり、英國はその支配的權力をもつて印度の産業の發達を妨げ、印度を英國産業の發達のために犠牲にし、その原料の大供給國となし、またその製品の大市場としたのである。即ち英國は商工業をもつて立國々策としたのであるが、そのために印度に於ける商工業の發達を極度に抑制しその發達を妨害したのである。綿業に於いては殊に甚だしかつたのである。英國の綿業の發達を促すために印度の農村で行はれてゐた手紡ぎ手織の綿糸布工業さへもこれを破壊せざればやまなかつたのであつた。かくして英國の産業革命が行はれたのであつた。今日の英國は印度を犠牲にして築きあげられたのである。

實に英國は印度の手織業及びその紡績を破壊した張本人である。それは自由競争によつてではなく、支配的權力をふるひ狂暴な法令の力によつてなされたのである。



西暦一七〇九年、英國の議會に於いて印度の綿糸布の輸入防遏に關するいろいろな法案が通過したのである。そして英國國民の印度綿布及び更紗の着用または加工するとは禁止された。それは當時の英本國の綿業が印度のそれに敵しがたく、まさに滅亡せんばかりであつた故に、これが救済策を速かに講じなければならぬといふ理由によつてなされた手段であつたのだ。この法令に呼應して印度に於いて東印度會社は有效適切どころか最も強い暴壓政策をとつて印度の綿業破壊を斷行したのであつた。その結果英國は歐洲の市場から印度の綿製品を驅逐したばかりではなく印度に自國製の綿糸布を持込み、終には木綿の本場たる印度をして英國製の綿製品の過剰に惱まさせたのである。その英國の綿製品が印度にはいつた比率を西暦一八一八年を一とするならば、西暦一八三六年には五千二百といふ素晴らしい飛躍的の指數を示してゐるのである。また西暦一八二四年に英國の對印度モスリンの輸出が僅かに百萬ヤードしかかなかつたものが、それより十四年後の西暦一八三七年には六千四百萬ヤードに飛躍してゐ

る。これをもつてしてもいかに英國が自國興隆のために印度を搾取し、それを犠牲にしたかゞ明かである。そのために印度に於いて機業の盛んであつた都市、ダツカの人口は十五萬から二萬に激減したのである。

尙ほさきに述べた印度綿製品輸入防遏法といふのは印度、ベルシヤ、支那産の加工された綿布及び型付または染色された更紗を着しこれを所持し、または賣却したものは、何人と雖も二百磅の罰金に處すといふのであつた。またその頃の兩國の關稅率をみるに英國の印度向綿製品に對しては僅かに三・五%の關稅しか課せられないのに反し印度綿製品の英國向けのものに對しては一〇%といふ三倍の無暴極まる關稅を課したのである。

かうして壓迫される印度綿製品と、保護される英國のそれとの消長を數字に求めるならば、英國の東印度及び支那協會長ラーベント氏の表を拜借してこれを示すことができるであらう。



| 年次    | 英國の對印度輸出<br>(單位ヤード) | 印度の對英國輸出<br>(單位ヤード) |
|-------|---------------------|---------------------|
| 一八一四年 | 八一八、二〇八             | 一、二六六、六〇八           |
| 一八二一年 | 一九、一三八、三一六          | 五三四、四九三             |
| 一八二八年 | 四二、八二二、〇七七          | 四二二、五〇四             |
| 一八三五年 | 五一、七七七、二七七          | 三〇六、〇六八             |

これと同じ減退の趨勢は印度から英國以外の諸國に向け輸出された綿製品にも現はれてゐるのである。即ちアメリカ向輸出は西曆一八〇一年には一三、六三三包あつたが西曆一八二九年には二五八包に減退してゐる。また西曆一八〇〇年に一、四五七包あつたデンマーク向輸出が一八二〇年には一五〇包以下に減退してゐるのである。

かくの如く印度の産業が英國の支配的權力によつて壓迫を加へられ、破壊工作が進められたにかゝはらず英國から強請される印度の年々の貢納金は支拂はなければならず、そのために印度は益々輸出を振興せしめねばならなかつた。既にその工業機構を

破壊されてゐる印度としては輸出振興の對策を農産品に求めねばならなかつたのである。それで原綿、羊毛、穀物、阿片、インド鹽及び黃麻の輸出増大により漸くこれをまかなつたのである。今これを印度の輸出入表の數字によつて示すこととしよう

印度輸出入表 (單位百萬磅)

| 年次       | 輸出    | 輸入    |
|----------|-------|-------|
| 一八三四—三五年 | 八、一八  | 六、一五  |
| 一八三九—四〇年 | 一一、三三 | 七、七八  |
| 一八四四—四五年 | 一七、七〇 | 一四、五一 |
| 一八四九—五〇年 | 一八、二八 | 一三、七〇 |
| 一八五四—五五年 | 二〇、一九 | 一四、七七 |

この表によつて明かな如く二百萬ポンド乃至五百萬ポンドの富が年々輸出超過の形をとつてインドから英本國へ流出してゐるのである。これは勿論英本國のインド搾取



の一面を示すものである。

しかも、それはたゞ一面にしかすぎないのだ。英國は他の形をとつてインドを搾取した方がそれに増して大きなものであつたらう。何となれば、インドが英國に貢納した金額は、インドから支那へ輸出した阿片の輸出税を除き毎年平均三千八百萬ポンドであつたといふから――

## 一一 東印度會社の暴政

東印度會社は印度に於ける政治的統治權を握るとともに、印度の貿易その他の經濟的の實權も握つてこれを獨占して印度の搾取をほしきまゝにした。たゞに印度内地やその沿岸諸島の航海貿易の權益を獨占したばかりでなく、支那に對する進出、東洋と歐洲との貨物輸送もまたその獨占するところであつた。これによつてその權力の偉大さが窺はれるのである。

更らに印度内地に於ける會社の高級吏員の專横、暴舉は全く目に餘るものがあつた。原綿、鹽、阿片、その他の農産物を會社が買入れるにあつても、彼等は勝手につけた掠奪にもひとしい低廉な値段をつけて權力づくめでこれを買取つたのである。だから一度彼らの寵をうけたならば鍊金師よりなほポロイ金儲けのできる條件でいろ／＼な請負をすることができたのであつた。そして一度この請負契約を手に入れたならば一夜にして巨萬の富をつくることができた。これについてはこんないゝ例がある。それはワールン・ヘスチングスに關する英國議會の裁判記録にあるホンの一例にしか過ぎないのであるが、これによつて他を推察することができるであらう。それは阿片を産する地方に居つたスリバンといふ者がそこからかなり距つたある地方に公務を帯びて出發するとき會社から阿片請負證書を貰つた。

この阿片請負證を手に入れたならば、當時の印度では阿片の賣買により巨額の利益を得ることができたのである。従つてこの證書もまた高價に賣買されたのであつた。



その證書を會社の高級吏員の寵をうけてゐたスリバンは只で貰つたのである。何と世にこれ位うまいことはまたとあらうか。裁判記録によるとスリバンは四萬磅でピンといふ者にこれを賣りピンはまたこれを六萬磅で他に賣り二萬磅の巨利をせしめた。最後にこれを手に入れた者が彼らに數倍する莫大な利益を得たといふのである。

ざつとこんなわけで東印度會社の暴政は實にひどかつたのである。そしてその高級吏員のとつた不淨な金もまた少くはなかつた。

印度帝國の基礎を確立したといふので、英國史上に燦として輝かしい存在をなしてゐるクライブは年三萬ポンドの俸給の外に二十萬ポンドの金を着服したといふことが記録に残されてある。また彼の傳記を書いたマコレーは彼の暴政についてつぎのやうに言つてゐる。

「彼は何らの躊躇もなく嘘言を弄し、偽善的に媚び、證書を偽造し、契約を蹂躪した」と。かうあげて來ると、英國の印度統治位極惡非道なものが世にまたとあらうか

といふ感を深くする。クライブは晩年自責の念に堪へず自殺したのもまた道理なりといはねばなるまい。

更らに東印度會社の暴政について英國の議會に提出された一つの書類がある。それによると西曆一七五七年から十年間に東印度會社の社員たちは、印度人から六百萬磅を收賄したことが記録されて居り、また西曆一七六九—七〇年の間に、ある英人が米の買占めをやつて法外な値を吹つかけたために一つの飢饉を起したといふ社會禍さへ招いてゐる。

それらのことにも増した東印度會社の暴政はその土地政策にあつた。

東印度會社が統治の初め頃、その地租徴收を舊來の印度の習慣に従ひ、デメンダーと稱する地租徴稅請負業者にこれを請負はせる方法をとつたのである。その請負業者を決定するのは入札により最高納入を會社に約束する者を落札者として決めたのであ



つた。そしてその請負期間を十二年にして、その請負業者はその区内の農民に對しては恰も王者の如き態度をもつて臨んだのであつた。そして彼が如何なる手段をもつて徵税しやうが、どれだけ高率を農民に課さうが、またこの徵税権を賣買または擔當に入れやうが、會社は一切頓着しないのであつた。従つて干涉もしない。但し請負業者が契約の金額を納入しない時には、會社はその徵税権をとりあげるのであつた。這般の消息を傳へるものとして西曆一七七二年にベンガル州の參議院が會社の取締役會に送つたつぎのやうな文書がある。

これは「ナナムのデミンダー大農場主たちに對して出来る限り多くの歳入を強請したが、その代はり彼等に下層の一人のこらずから掠奪する特權を残して置いてやつた」といふ文書である。世にこんな暴政がまたとあらうか。全く呆れ果てた暴政である。だから請負業者はいかに農民が困窮してゐやうが、またどんな不作に苦惱してゐやうがそんなことにお構ひなしで搾れるだけ搾つて、出来るだけ多くの地租をかき集

めることに努力したのである。實に無慈悲な涙なき仕業である。彼等には社會政策も何もあつたものではない、たゞ物慾あるのみだ。

## 一二 印度の飢饉

かくの如くできる限り英國は印度を搾取した。そのために印度は窮乏のドン底に陥り、印度大衆は飢饉線上を前せざるを餘儀なくされたのであつた。そして印度大衆を死の谷に蹴落す飢饉の災厄は屢々起つた。中にも西曆一七七〇年にベンガル州に起つた大飢饉は、印度史上に空彷彿して紀後ともいふ程に悲惨なものであつたといふ。餓死者無慮一千万人といはれ、同年の五月九日付のカルカッタ參議院の記録に、「蔓延する飢饉のため夥しい死亡者が出て、窮民の乞食群に顛落する者は日々數萬に達し、乞食群の増加は言語に絶する。バーネア州の如き、曾て豊かなりし土地に於て尙且つ住民の三分の一が餓死した程である。ましてその地の地方に於ける慘狀は決して



これに劣るものではない』とある。これによつてその惨状のいかにひどかつたかが想像できやう。

かゝる悲惨な飢饉の起つた場合、若し印度が獨立國であり、同胞の統治者を戴いてゐたものとすれば、政府は必ず國民を飢餓から救ふ對策を講じ、適切な社會政策を施したはずである。けれども不幸なる印度人は、印度を搾取して飽くことを知らない英國人のために統治され、この人生の悲惨な谷に蹴落されたのである。英國は、ナンで窮民を憐れみその救濟策を講じるやうなことをしやうか。たゞ救濟策を講じないばかりでなく、更に苛酷な搾取の鞭が彼らによつて加へられたのであつた。西曆一七七二年に、ダーレン・ヘスチングスは東印度會社の取締役會に「ベンガル州住民の三分の一は餓死し、その結果耕作面積は縮小したにもかゝらず、一七七一年度の徵稅額は一七六八年度のそれよりも超過した」と報告してゐる。國民は飢餓に泣いてゐるとき、しかもその擔稅範圍がひどく縮小されてゐるときに、平年よりもその徵稅が超過

したといふことは、とりも直さず、納稅者一人一人の負擔額が、甚だしく増加されたことを示すものであつて、それはいかに英國が印度大衆を苛斂誅求したかを證するに足ると思ふ。

### 一三 鐵道と灌漑

印度にも鐵道が敷設された。英國の資本家はこの鐵道投資の理由として印度の極貧化を防ぐためだといつたのであるが、それは全くの名目に過ぎないものであつて、實質に於いてはこの鐵道の敷設は英國が材料賣込、その他によつて印度をより大きく搾取するために起した大事業であるといつても決して過言でないのである。といふのは英國はこの事業によつて巨大な利益を得たが印度人は結局に於てその敷設の費用を負擔させられたばかりではなくその鐵道の旅客として汽車に乗るときには極端にひどい待遇をうけたのである。



またこの鐵道の敷設を計畫するにあつても英國は印度彈壓の軍を動かすときの作戰計畫に重點を置き、そのつぎに英本國の商工業者の利益をはかることを念として設計したものであつて、印度の鑛産の開発とか工業の發達とかいふことには一顧も拂はなかつたのである。

印度の鐵道に對する投資には五%の利潤が保證されてゐたのだから、資本家としてはこの鐵道事業によつて利潤がなくともいゝわけで、普通の鐵道敷設を計畫する場合にするやうに、その沿線の鑛山の發掘、工業の發達によつてその利潤をはかるといふやうなことは、印度の鐵道敷設の場合に於ては一切も構ひなしといふ、實に變則極まるものであつた。またその建設費の如きも實に消費が多かつた。印度の交通機關の親ともいはれるダルハウヂイ卿が、最初鐵道建設を計畫するにあたり、「鐵道を以て印度を掩ふにはその費用が一哩あたり八千磅で充分だ」といつたのだが、西曆一八六八年までに起工された鐵道は、一哩あたり一萬八千磅の巨額の費用を要してゐる。また元

印度總督府財務長官ウキリアム・マッセイは英本國に歸つて議會に議席を占めるや、西曆一八七二年に議會の一委員會に於いて、「印度の鐵道敷設の資本は勿論英國の資本家によつて投資されたのであるが、彼らは印度の歳入によつて五%の利潤が保證されてあるから、彼らの投じた資金がどこに投じられやうと、或は煉瓦または漆喰に化せられやうとも彼らにとつてはさして關心するの要がなかつた。従つてその結果は巨額の浪費を必要とされたのである。その一例として東印度鐵道の費用をこゝに擧げるならば、予の記憶に誤りなくば一哩約三萬磅であつた」と喝破してゐる。これによつてもいかに印度の鐵道建設費が多く浪費されたかといふことがわかるだらう。

印度に於いて眞に、印度大衆の利益を考慮して事業を起すとしたならば、鐵道よりも灌溉の構築こそ大いに力をいれてやらねばならぬものである。

元來、印度は農業國である關係上、その繁榮は水利と非常に密接な關係をもつてゐる。



だから英領になる前に於て、すでに灌漑用としての運河はかなりに發達してゐた。そして先年の國勢調査によると、地方の人口の密度と農業的價値は水利の便、不便と關聯してゐるのである。たとへば、水が豊富にあつて、灌漑が自由にできるヒマラヤ山麓の上部バツイ・ドウでは一平方軒あたりの人口が二五一を算するに反して、乾燥地帯といはれる北部シリンド平原に於ては一七七を算するにしか過ぎないのである。R・ムカジイ博士の説によると印度に於て土地が單に肥沃だといふことは、決して人口の稠密と關聯をもつものではない。それは寧ろ雨と關聯をもち、更に密接な關聯關係をもつものは灌漑の便、不便であるといひ得るといふことだ。

即ち人口の動勢によつてこれを示すならば、バンジャツプ州のリヤルプールは西曆一八九一年に人口の密度僅かに七であつたが、西曆一九〇一年に運河が開けて以來、一躍一八七となり、西曆一九一一年には更に二七二といふ飛躍振りを示してゐるのである。

かくの如く印度に於ては灌漑は國民の生活とその幸福、更に彼らを通じて全人口の福祉に大きな關係をもつものである。だから古來印度に於ける統治者の治績及びその臣民の繁榮は、灌漑施設の構築及び維持によつて測られたのである。即ちムガル帝國の中央政府の没落は灌漑を閑却したことによるのである。

これ程に印度の國民生活の幸、不幸はその灌漑施設の完否に比例する關係をもつてゐる故に、若し英國にして眞に印度國民の幸福を念として、その極貧化を防ぐために投資するものであつたならば、鐵道よりも寧ろ灌漑溝の構築に投資し灌漑施設の發達をはかるべきであつた。だが英國は灌漑施設の構築を選ばずして鐵道を選んだところに、英國の利己的觀念の働いてゐることが明かに窺はれるのである。この間の消息について、ロメツシユ・ダット教授は、その著『英領印度經濟史』に於て次のやうにいつてゐる。

『印度の行政に對する英國の貿易業者の勢力は、印度政府が印度に於て鐵道の建設



を目的とする諸會社に對して、印度の歳入による一定率の利子を保證しなければならなかつた程強大なものであつた。二億二千五百萬磅の巨額の金が諸鐵道建設のために費されたが、それによつて利潤が生じるどころか、西曆一九〇〇年に至るまでは、印度人の納税者にとつては四千萬磅の損失であつた。また、鐵道建設のために印度の農業の利益が殆ど閑却されてゐたことは、西曆一九〇〇年までに僅かに二千五百萬磅の灌漑事業費が費されたに過ぎず、また、印度の全耕地面積、二億英反以上のうち僅かに二千萬英反の土地しか灌漑されてゐなかつた事實に照らせば明かになるだらう』とされば印度に於ける鐵道建設の初期に於て、鐵道と運河との利害得失に關し大いに論争が行はれたのである。即ち印度をよりよく認識し、印度大衆の利害を考慮するものは運河支持者となり、運河は運輸及び灌漑の二重の目的に役立つことを主張し、その建設費及び維持費は鐵道のそれに比して遙に安いことを説いたのである。しかし、權力は遂に正論を斥け、英國の貿易業者の利益のために印度三億五千萬の大衆の利益

と幸福は全く蹂躪され、犠牲に供されたのであつた。即ち、行政者の頭には、印度大衆の利益よりも英國の資本家の要求の方が強い影響を與へ、遂に灌漑事業に僅少な金額しか投じられず、その反對に鐵道の建設にその六倍にも餘る巨額の金が向ふ見ずに浪費されたのである。

東印度會社の營業方針についてみてもいかに英國は印度國民大衆の利益を無視したか窺はれるのである。即ち植民政策の原則として同社の繁榮に俟たねばならず、同社の營業は印度國民大衆の繁榮に依存するものであらねばならぬ、従つて同社としてはこの間の事情を理解し、先を見透して印度國民大衆の利益をはかることを考慮してその營業方針を樹つべきはずでなければならぬ。ところが、事實は大いに之に相反したものであつて、印度國民大衆の利益と密接な關聯をもつ灌漑に對しては殆ど顧みるところがなく、たゞ僅かに同社は二、三の舊施設の修復をなし、また一、二の新運河



の開墾をなしたに過ぎずして、肝腎の貯水湖や井戸を設けることを閑却したために、廣大なる面積の土地を荒廢させたのであつた。その上に同社は土地年貢及びその他人頭税等の悪税を重課したのであつた。ために印度の大衆は疲弊困憊の極に達し、西曆一八五八年に英王室が印度政府を引継いだときには公債の急激な膨脹、政府費用の増加等のために増税は必然行はねばならなかつたのである。けれどもそれは農業收穫の改善を行ひ、何等かの施設をしなくては到底國民の堪へ得るところではなかつた。灌溉が行はれず、農民は原始的な非科學的方法によつて耕作してゐたのだから、土地生産は極めて少ないのみならず、英國の機械工業の壓迫をうけて手工業を破壊されたために、農民の生活は益々窮迫を告げるばかりであつた。そこで政府としては、灌溉施設をしなければならぬ必要に迫られたが、それを商業上利益の多い棉花などの栽培地に施し、ランカシャの綿業者の需要を満たし、政府の徵稅額を高める方に主力を注いでやることにした。その結果、綿業者と政府は利益をうけたが、農民は依然とし

て貧困の域を脱することができなかつた。

#### 一四 英國の残忍性

上に述べ來つた如く、英國は奸策を用ひ、ひどい壓制を加へ、暴虐の限りを盡くして印度を搾取した。その結果、印度は大いに疲弊し印度の國民は塗炭の苦しみをしなければならなくなつた。しかし印度人にも赤い血が流れてゐる。祖國を愛し、村を愛し、更に兄弟を愛する人情がある。英國人の搾取に遇つて國は亡び、村は枯渴し、兄弟はやせ衰へる悲惨な情景を目のあたりに見れば誰か悲憤の涙を流さざるを得んやたしかも英國は搾取の手を緩めず、益々苛斂誅求の度を増し、壓制が加へられるに於ては、いかに温順なる印度人と雖も、既に默從の限度を超えた英國の暴虐に反撥せざるを得なくなるのが必然的結果でなければならぬ。

天はいつまでも英國の暴虐を容すものではない。いつかは彼らが印度に於て極惡非



道な政治を行つた罪業の報復があらねばならぬ。十九世紀の中頃になつて英國は印度に於けるキリスト教の傳道に努力し、印度在來の宗教に彈壓を加へたため、印度人の對英不満はいよゝゝ高揚して英國に對する怨嗟の聲は印度全土に滿ちるの觀を呈したのであつた。

かうした印度國民の英國に對する不満が原因をなして西曆一八五七年に印度兵の抗英反亂が起り、それが動機となつて印度國民の抗英驟起は恰も燎原の火の如き猛烈な勢ひを以て印度全國に波及し、一時は英國の印度統治が危殆に頻するに至つたのである。

この土人の蜂起は非常に優勢であつてカウンプール、デリー等に於て猛烈な市街戦が行はれたのである。然しバンチャブはこの反亂に於て異例をつくつたのであつた。それはこれまでバンチャブの農民たちの戦闘性の強いこと、その果敢な進出振りとに手を焼いてゐた英國ははやくからバンチャブに於て妥協的態度をとり、こゝでは他の

地方のやうに生産物の半分、またはその四分の三を地租として奪取されるやうな誅求もなく、一〇乃至一五%の地租を拂へばよかつたので、この地方だけは他に比して對英感情の悪化は緩慢であつた。だから英國はバンチャブの土人兵を徵募して他の地方の平定戦線にたゝしめたのである。

反英叛亂の狼火が高まるに伴れ英國は叛亂部隊の先頭に立ち、その指導者として活躍してゐる領主や地方の有力者を買収する策をとり、叛亂部隊の切崩しをはじめたのであつた。

永らく英國の壓迫と搾取とに遇つて疲弊困憊した領主や有力者は憐れにも買収といふ英國の奸策に陥り、彼らの抗英の氣力を失つたため、叛亂部隊は指導者を失ひ統制を缺いて遂に英軍のために平定されることゝなつた。しかしこの叛亂は相當猛烈なものであつて、英本國がこれを平定するまでにおよそ二年の日子を費し、西曆一八五九年一月に漸くこれが平定を完了したのであつた。



さて英國は、かうした印度人の猛烈なる反抗に遇つたが、それを漸くにして平定するや、その醜い氣狂じみた復讐心はいやが上にも高まり、野獸的な残忍性を暴露して印度人の兵士たちを大砲で射撃して吹き飛ばしたのみならず、戦勝者たる英軍が當然保護を加へなければならぬ老人や婦女子の非戦闘員を絞刑、または拷問にかけ、惡鬼も尙ほ顔をそむけるやうな残忍な、そして慘虐極まる行爲をなしたのである。その頃の記録によると多數の老人や婦女子が村々に於て英軍のために焼き殺され、斬殺されたといふことであつて、英國人はかうした老人や婦女子の一人をも容赦しなかつたばかりか、印度人をひどい目にあはすことは「おもしろく、楽しいもの、そして非常に愉快な氣晴らしであつた」と放言したといふことである。

軍法會議の裁判官や監督官たちは終日に亘り、老若男女に對してむやみやたらな暴虐さ慘忍さで絞刑の宣告を言ひ渡し、たゞ單なるいたづらから叛軍の旗を振り銅羅を打たうとした數人のいたいけな少年たちを死刑に處した。そして残忍な英人たちは、

この絞刑また死刑の執行者たることを志願して慘虐極まる方法によつて絞首、斬殺を行ひ、ある紳士は高いマンゴの木を絞首臺に使ひ、また象を吊り下げ臺に使ふなど、いろ／＼と刑の執行に關する慘虐な工夫をこらし「非常に藝術的なやり方で」息の根をとめたと揚言し、その數の多いのを誇つたといふのである。まだひどいものになると婦女子を『八の字型』に縛つて鞭うつて殺したばかりではなく、これを見せ物として楽しんだといふのである。かやうにして殺された憐れな印度人の數は六千に及んだといふ。

とにかく、この叛亂事件により英國の残忍性は遺憾なく暴露された。

この事件の結果、英國は印度の如く廣大な國の統治にあたり、交通機關の整備の必要なることを痛切に感じた。それが英本國の注意を喚起して、前項に述べた印度の鐵道敷設計畫はこの事件のために一時頓挫したけれども、事件後には却てその計畫は素晴らしいスピードをもつて促進されたのであつた。



まだ印度の統治を一會社に委任して置くよりも、中央政府が直接その責任をとることが安全なることも痛感されたのであつた。その結果、東印度會社の存続は許したがそれはたゞその資本に對する配當を受取り、且つ處理するだけにとゞまり、これまで同社の取締役會にあつた権限が印度事務大臣の手に移されたのである。

## 一五 第一次歐洲大戰と印度

英國の利己的政策は印度の産業を破壊し、その發達を阻害して印度の大衆を世界の進歩圏外に置き文化の恩澤に浴せしめなかつたが、いかに英國は壓制して印度人の目を蔽ひ、印度人を墮眠の穴におしこめて置かうとしても、時の流れは印度人の長夜の眠りを醒まし、印度にも文化の風が吹く秋が訪れる時代をつくつたのである。しかもそれは英國が印度を搾取する手段として選んだ、鐵道の建設を契機として起つた現象だから甚だ愉快である。

まづ鐵道の建設は印度人に機械の便利なことを教へた。そして交通機關の發達は頑迷な印度官憲即ち英人官吏の壓制な手を押しつけて印度へ文化生活を注入したのである。

元來、印度には木綿、黄麻、鐵、石炭等の資源が豊富にあつて、印度自體がこれら資源の加工を企圖するならば有利に加工し得られる可能性があつて、當然この産業は發達すべき素地をもつてゐるのであるが、それが印度に統治者として臨む英國の壓制のために妨害され、抑壓されてゐたのであつた。ところが鐵道の建設によつて機械の便利さを知つた印度人の間に知識慾が高まり、殊に中産階級の間には教育の普及が急速に行はれ、長夜の眠りをむさぼつてゐたインド大衆は覺醒し、文化生活の攝取に着目するやうになつた。それに加へて英本國の強請する貢納金の増昂のために印度の農業に對する壓迫が加重したことなどが要素となつて、印度の産業資本主義の出現は促進されることとなつた。



前にも述べた如く、英國は印度を自國産業の原料供給地となし、またその生産品の市場化することをもつて政策となし、その政策は全く貿易業者、製造業者、金融業者の利害關係によつて左右され、印度の工業化は甚だしく阻害されたのであるが、その間にも尙ほ且つ印度産業の基礎工作は施されてゐたのであつた。即ち十九世紀の前半に於ては木綿、黄麻等に關する纖維工業が起され、十九世紀の後半には石炭、鐵等に關する重工業が擡頭したのである。

かくの如くして印度産業の工業化が漸くその端緒についたが、それも印度独自の資本によつて企圖されたものではなく英國資本が、その國內事情等のためにこゝに投下されたために起つた現象であつて、印度の資本は辛じてそれに參加するに過ぎなく、假りにその資本の過半は印度人によつて投下されたものであつても資本の統制は矢張り英國人の手にあつた。

十九世紀に於て行はれた英國労働者の組合組織運動は、團體の壓力により製造業者

に對して從來よりも高い賃銀を要求すると共に、人道的な要求をもして、これを承認せしめた爲め、英國資本家の利益は大いに減殺されることになつたので、スコットランドの黄麻製造業者はその資本を印度へ輸出して印度に製麻工場を建設すれば、貧困な印度人を極めて低廉な賃金を以て使役することができ、英國々内で事業を營むよりもより一層の利益を收めることができるといふわけで、印度に工場を建設することゝなつたのであるが、これもまた英國製造業者自身の利益から割出された甚だ利己的な政策たるは言ふまでもないことである。

かうした資本の印度への輸出が石炭業者によつても計畫されたことがあるが、いかに黄麻製造業者や、石炭業者によつて資本の印度輸出が要求されたとはいへ、英國の産業全體からいふならば、それは決して利益ではなかつた。矢張り印度を英國産業の原料地となし市場として隷屬せしめることは利益であつたに違ひはない。そこで英國では自國産業を保護するために印度産業の生長を阻止しようとしてあらゆる手段をと



つたのである。たとへば西暦一八六〇年には印度の資本家に對して所得税を課する手段をとつたし、西暦一八五七年の戦役に於て巨額の軍費を消費した財政難の苦境から脱するため、収入の増加をはかる必要に迫られてゐた印度行政官がずいぶん邪魔したにも拘はらず、マンチエスター製造業者の主張にかゝる工業製品にする印度の輸入税の減額は斷行されたといふ事實がある。これによつてもいかに英國は印度産業の生長を阻止することに熱心であつたかが窺はれるのである。

英國の對印度政策は「搾取」以外の何物でもない。それはたゞもう「搾取」に終始してゐるのである。だから印度の産業が發達して來て英國のそれが打撃を受けることになれば、英國にとつて、それこそ一大事である。だが印度を英國自身の市場としてゐる以上、英國の重工業の發達に伴ひ印度にいろ／＼な機械類の賣込みが行はれることが必然であつて、機械類を賣込めば必ず印度に産業が起ることになる。そこに英國の大きなデイレンマがあつた。そこで英國は何としても、このデイレンマを克服しな

ければならぬ。その方策として英國は關稅政策を執りあげたのである。即ち西暦一八七五年に印度の輸入税を五%に引下げ、更に一八七九年には輸入綿製品に對する輸入税は全く廢止されたのである。

その後、收入激減のために惱まされた印度行政官は、英本國の製造業者と論争した結果、西暦一八九四年には輸入税制度の回復があつたが、糸類及び綿布類は免税されたのである。

ところが、その後も印度の金融はひどく逼迫してひどい財政難に遭つたので綿糸綿布も課税圏内に入れることになつたのであるが、ランカシアの製造業者は、彼ら自身の利益を保護するために織物類に對する課税を三・五%の低率にすること、英國以外の諸國の商品に對して高率課税をなすこと、印度國內の製品に對して生産税を課することを強硬に要求して、これを印度行政官をして遂にこれを容認せざるを得ざらしめたのである。



たゞそればかりではなく、こんどは財政的にも印度の産業を壓迫する策をとつて、西暦一八九八年には印度貨幣の對英換算價值を銀一志二片から一志四片に引下げ、印度貨幣を擬制的金本位にしたのである。

かくの如くして英國は印度の産業に對してひどい壓迫を加へ、その發展を阻害して自國産業の發展をはかつた。

かうした英國の印度産業の壓迫、そしてその發展を阻害する政策は西暦一九一四年の歐洲大戰の始まるまで引續き行はれたのである。ところが歐洲大戰が始まるや英國はこの政策にある程度の變更を加へなければならぬ必要に迫られたのである。それは歐洲大戰が始まつたために、英國の工場がすべて軍需工場として活動せねばならぬこととなり、印度市場へ自國品を氾濫せしめてこれを獨占することができなくなつたところへ、日本及びアメリカの商品が波濤の如く押寄せて來て、印度市場はこれら兩國のためにまさに奪はれんとする情勢となつたので、英國の製造業者は大いに脅威

を感じることとなり、せめて印度産業の發展を助けてこの市場への第三者の進出を防がうとする遠謀から出たものであつた。

即ちそれは英國の資本によつて左右される印度産業を發展せしめ、その製品をこの市場に供給せしめることは外國の競争者にこの市場を奪はれるよりも英國にとつて利益であるからである。そこで印度産業に對する英國の壓迫の手は緩められることになつたのである。

更にこのとき英國の對印度産業政策を轉換せしめた理由として、當時の印度の國內的政治情勢も有力に働いたことは勿論である。

即ち、それまで土地問題に關聯して農民の間に起つてゐた不穩な反英氣勢は印度駐屯の英國兵が戦地へ出征したため、警備になると同時に俄然勢力を得て暴動化したのみならず、それと併行して印度兵の部隊内にも續々叛亂が起り、當時猛烈な勢をもつて印度全土に擴がりつゝあつた印度獨立運動は之らの内亂蜂起と結合して印度全土は



物情騒然たるに至り、英國の印度統治は重大な危機に直面することとなつたのである。そのため英國は印度を失ふ覺悟をせざる限り、これまでの如き壓迫政策をとることが全く不可能となつたのである。何としても英國は鬱然たる印度大衆の反英思想を緩和する策をとらねばならぬ。それは英國にとつての急務であつた。その結果、西曆一九一六年には三・五%（後年一五%に引上げられたが）の保護税が輸入綿布類に課せられた。そして同年印度産業委員會が任命されて、工業的發展の可能性及び技術的條件の調査をやることになり、西曆一九一八年にはその報告として、（イ）工業的發展に對する政府の援助、（ロ）農業の近代化、（ハ）初等教育の普及（印度全人口の九〇%は文盲である）等を擧げたのである。

この印度産業委員會と並び、當時の印度國內の情勢に對するために印度官憲に於ても政治的讓歩を示す所謂モニターギユ・チエルムフオード報告を發表した。その結果西曆一九三一年に財政調査會を設け、翌年に、（イ）税率委員會の査定に基いて行はれ

る保護、（ロ）純歳入の目的以外の各種輸出税の撤廢、（ハ）印度の經濟的損失とならざる範圍に於て英國との特惠條約の締結をなすこと、（ニ）外國資本の自由流入、（ホ）急激な工業的前進といふ條項を盛り込まれた報告を發表したのである。

斯くの如く英國の自己生存の必要上の讓歩とはいひながら、英國の對印壓迫が緩和された爲めに印度の工業は大いに活氣づき、中にも纖維工業、鐵鋼工業はすばらしい生長をしたのである。その結果、ボンベイの纖維工場の利益は西曆一九一三年間から七年間に約三倍になり、一方印度の綿製品の輸入は大戦前に比して三分の一に減じたのであつた。また重工業に於ても甚大な利益を得た爲め印度人の所有にかゝるタタ製鋼會社、ベンガル鐵鋼會社、その外英人系重工業會社は猛烈な勢を以て隆盛發展し、戦前には英國の資本によつて獨占されてゐた印度の工業界に於て、印度の民族資本は完全に英國資本を驅逐して強固な地歩を占めるまでになつたのである。



さて、かうして印度の工業は發展の情勢下におかれることになる、英國はこれを利用して自己の國際的一地位を獲得して自己の勢力の増大をはからんと企圖し、西曆一九二二年の國際聯盟理事會に於て英國の代表が、印度は約二千萬の工業人口を有してゐる故に世界の八大工業國の列に加はらしむべきであると主張したのである。が、西曆一九二一年の國勢調査によると印度の工業人口は千五百七十萬しかなく、明らかに英國は國際聯盟理事會を欺いてゐるのである。この事實はいかに英國が老獪であるかといふことを顯示して餘りあるといはねばならぬ。そしてこの企圖の裡に、英國といふ國は轉んでも只起きぬといふ強慾さが窺はれる。

英國が印度産業を壓迫する手を緩めたのは、大戰中これを利用して印度に於ける自己の市場勢力を防衛せんためであつたことは前述した通りであるが、さて印度の産業が發展して來るとそれが英國産業の競争者となり、英國貿易に害を及ぼすやうになつて來た。

このことにより英國は別の脅威を感じるこゝとなつた。

即ち戦前には印度市場へ供給する纖維製品の七〇%が英國のものであり、二八%が印度製品であつたのが、戦後には英國、二五%、印度六一%といふ地位を顛倒した現象を呈するに至つたのである。これは到底英國の忍び得るところではない。そこで英國は大戰が一度終局を告げるや、その對印度政策を元の攝取政策に還元し、自國産業の復興のために印度のそれを犠牲に供せんと企てるに至つた。そして英國商品のために印度に於ていろいろの特惠關稅が設けられたのである。つぎに爲替政策をとりあげて印度の留比貨幣率を引上げて一志六片として印度産業に壓迫を加へることゝした。更に英國の五大銀行は一舉に印度工業を殲滅せんとして攻撃的な金融政策をとつた。そのために印度人の企業家は軒並に破産したのである。英國は尙ほこれでも足らずとなし、西曆一九二一年—二四年の間に英人の印度企業侵入が猛烈に企圖された。そしてそれはいろいろの形をとつて行はれたのである、その第一の方法として西曆一九二



一年に印度帝國銀行が創立された。これは英國の資本を以て印度の金融界を統制し印度の全商社及び企業を間接に支配せんとする目的のために創立されたものである。第二の方法として、英國に於て登記された英國商社を印度へ轉籍せしめ、また印度に於て登記された英人商社に對する英國資本の直接投下をはかることがとられたのである。第三には英人諸商社が印度人經營の企業を吸収する策がとられたのであつた。

このうち第三の方法は、西曆一九二六年の頃から世界的に經濟界を襲つた大不況時代にあたり、多數の印度人經營の企業が崩壊するに至つたのを好機として、盛にその猛威を逞しうしたのである。たとへばこのとき五千人以上の労働者を使役してゐた半島機關車會社、南印度機工場等の大會社は背後に英國銀行の巨大な資本を擁してゐる英人との競争に對抗し得ずして崩壊し、これと同じ運命にあつた多數の群小印度人經營の會社が清算されたのみならず、タイル、製鉛、皮革、セメント、製紙等の事業もまた英國資本もしくはその統制を受容せざるを得なかつた事實の如き、這般の消息を

雄辯に物語つてゐる。

かくて英國は純然たる印度の工業化を妨害し、今日尙ほ印度搾取の魔手を縦横に揮つてゐるのである。

以上、英國の印度侵略搾取史の概略を述べたが、英國は印度に足場を得て東亞を侵略し、大英國を建設したものであつて、印度がなかつたならば恐らく今日の大英帝國は建設できなかつたであらう。

(完)



昭和十六年七月二十五日印刷  
昭和十六年八月一日發行



發行所

著者

發行者

印刷者

印刷所

東京市京橋區銀座三ノ三(豐玉ビル)

定價七十錢

川端 福一

東京市芝區白金台今里町七七  
藤井 祥正

東京市神田區須田町二ノ三  
加室 正義

東京市神田區須田町二ノ三  
須田町 印刷所

亞細亞畫報社

電話東京 66 二五三九番  
接替東京 一四八五二〇番



★★★ 錄記戰大界世次二第 ★★★

# 獨逸戰史

未發表の戦闘寫眞のみを掲載

本書は今次大戰に於ける盟邦獨逸の「勝利の歸史」を記録寫眞として輯録せるものである。本書に掲載せる寫眞は獨逸宣傳省及トランス・オツイアン社の直送寫眞約三千種中より特に約三百五十種を厳選したもので第二次世界大戰の歴史的記録である。世界驚異の焦點たる獨逸今次の大戰果は巻頭波瀾戰より初つて對蘇開戦に至る全巻を通じ、迫眞的魅力をもつて讀者の眼に迫るであらう。

絕對他社の企及し得ざる内容

## 二千部限定版!!

即刻申込

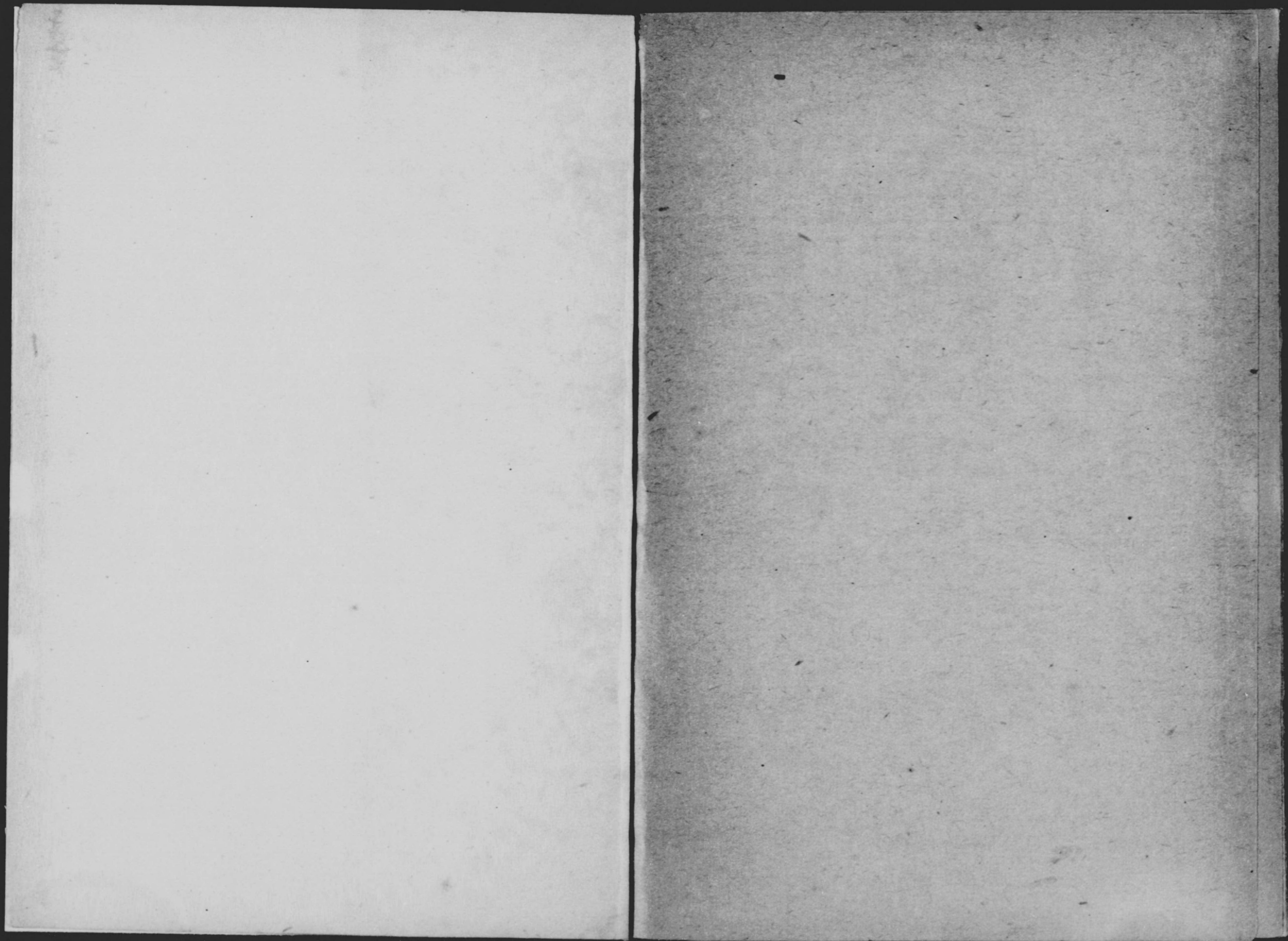
◎規格B5版、極上アート紙使用  
高級美術印刷 約二百五十頁  
三色版及多色刷戦局地圖  
解説軍事専門家諸權威執筆  
◎定價四圓八十錢 送料十八錢  
(八月中旬製本出来確定)

内容見本申込贈呈

●●●目によつて知る世界大戰の實相●●●

東京座口替振 社報畫亞細亞 座銀  
番〇二五八四一 番九三五二橋京電

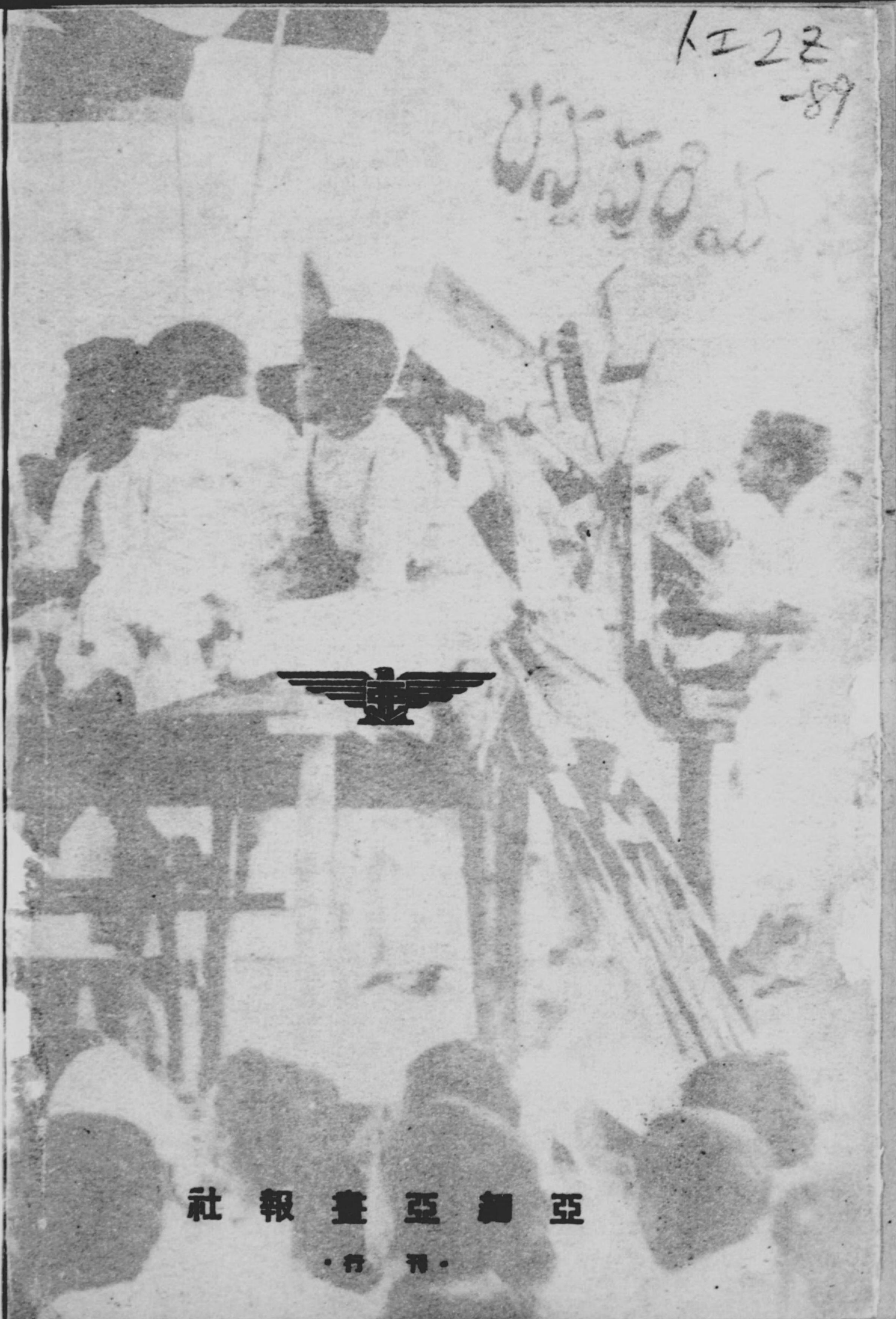






KI 22  
-89

Handwritten text in Arabic script, possibly a title or reference number.



亞細亞畫報社  
· 行 ·



